2003年度 Ⅰ.共通教育科目：密教美術の世界

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 雅秀, Mori, Masahide メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/23976

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

2003 年度

I. 共通教育：密教美術の世界

1. 序論（1） インド密教美術への招待

釈迦は一人、仏は多数の不思議。また、多数の仏はそれぞれ何を象徴しているのだろうか。

仏教の釈迦が開いた宗教ですが、釈迦以外にも仏がいたという考え方は、かなり古くからあります。インドの仏教史を見ると、一人、もしくは少数の仏から、多数の仏へという流れが認められます。それと同時に、釈迦の超人化や神話化も見られます。なぜ仏が多数必要であったかは、仏教の救済思想や世界観とも結びつく問題で、「仏陀観」と呼ばれることもあります。教科書の第 1 章はこの問題をあつかっています。とりあえず、てはじめに読んでみて下さい。仏の種類と多様性については、仏教のパンテオンを取り上げるときにお話しするつもりです。

簡単ですが、なぜ不動明王は普通なのですか？あと、なんでインド（本場）には不動明王像がないのですか。

授業でお見せしたように、不動が属する明王のグループには降三世明王や大威徳明王、愛染明王のようなものがいますが、いずれも多面多臂（つまりたくさんの顔や手）を有しています。不動明王はその中において、手や顔の数は普通の人間と同じで、その意味で「普通」と言ったのです。ただし、不動明王のイメージそのものが人間と同じであるとまでは言えず、たとえば、頭の上にハスの花を載せていたり（頂蓮相と言います）、目が左右で上下別の方向を向いていたり、口から牙を出しているなど、細部にはさまざまな特徴があります。不動明王は日本では絶大な信仰を集めています。各地に「～不動」とよばれる有名な不動がありますし、不動にちなんだ縁日や祭礼がよく行われます。日本密教では大日如来と同一視されたことも、この仏の重要性を高めた理由です（細かい背景は省略します）。それに対し、インドでは不動に対する信仰はあまりさかんではなかったようで、作例の少なさ（現在、2、3 例のみ）はそれに比例するようです。

マンダラはどのように使われていたのかということ。

マンダラについては 2 回分の授業を予定しているので、そこでじっくりお話しするつもりです。簡単に言うならば、礼拝や供養のような一般の仏像（仏画）と同じ目的以外に、儀礼の道具、瞑想の対象、仏教世界観の表象などの機能があります。

やっぱりインドにある仏像と日本にある仏像はどこかしら似ており、伝わってきたのがわかる。地図上で見るととても遠いのに、仏像を見る分では近く、すごいことだと思う。高校の日本史の授業等で覚えたのは日本のものばかりで、インドの似たもの、違うものが見れて（森による注・ら抜き言葉ではなく「見られて」にしましょう）おもしろかった。

日本の仏像の原型がインドにあり、両者がとてもよく似ていることを知ってもらうのが、この授業のねらいのひとつです。日本とインドのあいだには数千kmの距離があるのですから、このことは奇跡といってもいいぐらいです。見方を変えれば、仏像の形を正確に伝えることは、それを伝える人々にとってきわめて重要なことだったのでしょう。経典などの形で仏教の教えを伝えることも同様ですが、これこそ宗教の持つ力です（方向をまちがえるととても危険です）。これからいろいろな作品を紹介するので、似ているところや違うところ、あるいはイメージ全体から受ける印象などを、自分の目でよく確認して下さい。

まず密教という意味が分からないです。密かな宗

教かと思ったけど、有名な感じがしたので、本当の意味を知りたいです。

密教とは 5、6 世紀以降のインドで現れた仏教の一形態です。中国、東南アジア、ネパール、チベットなどに伝播しました。日本には平安時代の初期に空海や最澄に代表される「入唐僧」（にっとうそう）たちによってもたらされました。現在でもその伝統は生きていますし、チベットやネパールの仏教は密教の要素がかなり濃厚です。「密教」という言葉に相当するインドの原語は実はありません。日本の真言宗や天台宗の中で用いられ始めた言葉で、大乗仏教までの仏教を「顕教」と呼び、これよりも優れた教えで、しかも選ばれた者以外には秘密にされているという意図で付けられたものです。インド仏教の歴史を簡単にまとめれば、釈迦の時代を含む初期仏教（あるいは原始仏教）、部派仏教、大乗仏教、密教ということになります。インド仏教の最終的な形態が密教です。ただし、その時代も大乗仏教やいわゆる小乗仏教もありますので、段階的に変化したというわけではありません。また、密教の修行をすることが許されたのは、大乗仏教の修行階梯を終え、特別な能力（とくに実践における霊的な能力）をそなえたものだけといわれています。その特徴として、次のようなものをあげることができます。

・瞑想やヨーガによる神秘体験を悟りととらえる
・教理的には大乗仏教を継承、とくに空思想と如来蔵思想に基礎を置く
・複雑な儀礼体系をヒンドゥー教と共有
・壮大な神々の世界と精緻な図像学を保持

密教はインドの宗教全体から見ると、中世以降、流行したタントリズムと呼ばれる宗教形態と、さまざまな点で共通しています。タントリズムの特徴として、ある研究者は次の 5 点をあげています。①現世拒否的態度の緩和　②儀礼中心主義の復活　③シンボルとその意味機能の重視　④究極的なもの、あるいは「聖なるもの」に関する教説　⑤究極的なものを直証する実践（立川武蔵　1992『はじめてのインド哲学』講談社、pp.173-4）。よくわからないと思いますが、授業でも機会を見つけてお話しします。

オリッサ、ウダヤギリ遺跡発掘現場のスライドを見て、とてもきれいにレンガで寺院が造られていることに驚きました。ずいぶん昔の時代なのに、こんなにもきれいに作ることができる技術があったことはとてもすごいことだと思います。また、日本では仏像はお寺の中にあるというイメージだったので、外に仏像があったことには驚きました。

がっかりさせて申し訳ないのですが、ウダヤギリのレンガ積みの建造物は、最近の復元です。発掘現場では遺構のみが確認でき、それにあわせて、新しいレンガを積んでいるようです。インドの遺跡にはよくあることで、困ったことなのですが、どこまでがオリジナルで、どこからが復元かがわからなくなります。それはともかく、おそらく往年はレンガや石でできた壮麗な僧院があったはずです。巨大建造物は宗教的なものばかりでなく、社会的、政治的な威信を誇示することとも結びつくので、世界各地で古代から作られています（宗教が政治と結びつくのも一般的でした）。このような巨大建造物を作る技術は、古い時代からよく発達しています。インドの場合、インダス文明で知られるハラッパーやモヘンジョダロに、高度な都市文明があったようです。いまから五千年ぐらい前の話です。制作年代は下りますが、壮大なヒンドゥー教寺院が現在でも多数残されています。実際にその前に立ち、中に入ると、圧倒されます。

仏や如来や菩薩などの写真を見ても、その違いがまだよくわからないので、今後よく勉強したい。また、仏像の持つ意味や、時代背景なども含めて、見ることができるようになりたい。仏像を見て大日だとかがわかるのはなぜか、何を理由に区別するのかが知りたい。

はじめの頃は、どの仏像も同じように見えるはずです。しばらくすると、仏と菩薩、明王、女尊などのグループの区別が付くようになります。同じスライドも何度もお見せすると思うので、だんだんイメージが定着していくでしょう。時代によって違いますが、密教の場合、身体的特徴、持物、装身具、付随物（乗り物や光背など）によって、どの仏であるかが判断されます。このような特徴

を図像学的特徴といいます。教科書でも主要な仏については、その都度説明をしているので、挿図の写真なども見ながら、確認して下さい。特定の作品が何を表しているか決めることを「比定」とか「同定」といい、英語で identification といいます。

仏像の頭の肉のボコボコと、でっぱりは何の目的で作ってあるのですか。なぜ同じ大日如来坐像で、日本にあるのは顔一個なのに、外国のは顔四つあったりするんですか。釈迦の苦行像はとてもリアルに造られていますが、あれは実際にその釈迦の姿を見た人とかいるんですか。

頭のボコボコは仏頂（ぶっちょう）とか、肉髻（にっけい）と言い、釈迦を含む仏像の身体的特徴のひとつです。このような特徴に 32 あり、「三十二相」と言います。これについては授業で紹介します。大日如来の顔が四つあるのは、この仏が登場する経典に「あらゆる方角に顔を向けた」という記述があるからです。チベットでは四面の大日の他に、四体の大日如来を背中合わせにおいて、全体で一尊とする作品もあります。その方が頭でっかちにならずにすみます。釈迦の苦行像はリアリズムを追求した仏像のよい例ですが、もちろん、本当に釈迦を見て、それをモデルに作ったはずはありません。制作年代は釈迦の時代から数百年あとです。ところで、仏像のような宗教図像は、対象をリアルに表現することだけを理想としたわけではありません。むしろ、定型化、形式化することの方が、宗教美術としては一般的です。

仏像に対する知識はあまりないのですが、日本の仏像は時代ごとに見た目とか作りの様子が異なっていたけど（乾漆像や寄木造りなど）、インドの仏像にはそういうことはあるのですか。インドの仏像が同じ仏でも違う様をしているのは、それぞれの意図やイメージが異なるためだという説明を聞いて、なるほどそういう意味があるのか…と思いました。また、国境を越えても仏のイメージがそのまま伝えられているのもすごいと思いました。手や足が複数なのは、それぞれ数などに意味はあるのかとか、仏と一緒にあるハスの花やライオン、水牛の意味も知りたいと思いました。女性の仏像もあるのは驚きました。

インドでも仏像の素材は地域や時代でさまざまですが、石を用いたものと、金属製のものが多いようです。木製の仏像もあったようですが、ほとんど現存していません。様式にも同様に変化があります。これについては今回の授業で代表的な作品を紹介します。仏像の持つさまざまな意味や制作者の意図については、授業の一貫したテーマとして、いろいろ考えていきたいと思います。その一部については、教科書でも取り上げていますので、読んでみましょう。

日本の仏は比較的すっきりしていて、どの仏像も同じ種類ならば似たような感じだけど、インドやチベットなどの仏像や壁画は、とても鮮やかだったり、装飾品だらけのものや、逆にとてもみすぼらしいものがあったりと、個性豊かだと思った。やはりこのような美術にはお国柄が反映されるのだと思った。なぜ女性の仏は日本に伝わらなかったのか不思議だった。

たしかに日本の仏像は、インドやチベットのものに比べると、画一的で地味な感じです（それが「日本的」でいいのですが）。色彩感覚は人種や民族で大きく異なるようで、普通の日本人はチベットの仏画などを見ると、その派手さ（毒々しいとかけばけばしいという印象）に耐えられないようです。ただし、平安時代に中国から伝わった密教美術は、そのようなものにも通じる強烈な色彩感覚があって、おそらく当時の日本人は圧倒されたはずです。仏像などは現存していても褪色が進んでいますが、マンダラなどの仏画にそのような「非日本的な」色づかいを見ることができます。女性の仏は日本にも伝わっていますが、女性であることがわからなくなっていたりします。また、観音のように本来は男性の仏であったものが、中国や日本では女性のイメージとしばしば結びついたものもいます。

顔や手が多いのが謎です。ヒンドゥー教のシヴァ

神も手が多かったような気がするんですけど。
多面多臂に驚いたり、それが何を表すのか疑問に思った人が多かったようです。理由や意味については、授業の中でおいおい話していきます。ヒンドゥー教の神のイメージをお持ちのようで、たしかに、このような特徴はシヴァをはじめとするヒンドゥー教の神々にも見られます。仏教とヒンドゥー教の神々の交渉については、授業全体の終わりの方（たぶん7月頃）で取り上げます。

私は弥勒菩薩が好きでした。「リン」としたすがすがしいきれいさを持っていて、手を顎に当てている、その手の細さがかっこよかったです。こわい顔の仏があってびっくりしました。仏は優しいものだと思ってました。いろいろ見ることができて楽しかったです。
広隆寺の弥勒菩薩は日本人の理想の仏像のひとつでしょう。多くの人が日本の仏像の代表例として思い浮かべるようです。しかし、最近の研究では、この作品は日本ではなく、朝鮮半島で作られたというのが有力なようです。同じ形式の弥勒像が、何例か韓国に残されています。また、右足を左足に載せ、そこに右ひじをついて物思いに耽るポーズは、「半跏思惟」といいますが、この形式も中国から朝鮮半島を経由して日本に伝えられたものです。意外なことにインドの弥勒像にこの半跏思惟像は一例もありません。このように、同じ仏でありながら、イメージが異なることも、仏教美術のおもしろいところです。

インドの像が日本のに比べて腰（体）が細いのが気になった。仏が目をつぶっているのはなぜか。
前回お見せしたスライドの仏は、パーラ朝という時代のものが多いのですが、このころはご指摘のように体の線が細い仏像が好まれたようです。それ以前の時代には腰回りの太い、もっとどっしりとした仏像もあります。また、目の表現方法も時代によって違い、目をぱっちりと開けた仏像もインドにはあります。仏像の身体表現に着目されたのはなかなかいいことです。時代や地域、あるいは仏の種類によってどのような違いがあるのか、注意して見ていって下さい。

宝冠仏は装飾品を付けているが菩薩ではないのか。大日如来は如来であっても装身具を身につけていることが多いように思うが、それはなぜか。
たしかに一般に装身具を付け、豪華な衣装をまとっているのは菩薩の特徴ですが、密教の時代には、このような菩薩のような姿をした如来像が出現しました。その代表的なのが大日如来です。これについては教科書の第一章で詳しく取り上げていますから、読んでみましょう。

2. インドの仏教美術の流れ

ブッダの肖像が描かれない理由の説明として、好きな人の例で考えたとき、何となくインドの人々の気持ちが分かった気がした。
釈迦を人間の形（いわゆる仏像）として表現しないことは、インドの仏教美術の重要な点であり、宗教美術一般を考えるためにも示唆に富むので、私の授業ではよく強調します。いつもいろいろ説明の仕方を考えるのですが、ポイントは自分の身近なものに結びつけて考えられるかどうかということではないかと思っています。前回のたとえは、当時の仏教徒が釈迦のような「聖なる者」を、単なる歴史上の人物としてではなく、「他の誰よりも大切な存在」としてとらえていたということです。ちょうど、肉親や恋人のようなものなものです。そのような人を絵や彫刻で表現しなさいといわれたならば、どんなにリアルに表現しようとしてもつねに不満が残るでしょうし、それは対象に対する思いが強ければ強いほど顕著なはずです。

その一方で、そのような人物と密接に関わるもの（授業では恋人からのプレゼントを例としました）から、その人物の思い出や存在を強く感じることがあります。亡くなった人の形見などもそうでしょう。象徴とかシンボルというとむずかしいもののような気がしますが、このようなものと理解してください。釈迦の場合は、法輪や菩提樹がそれにあたります。いずれも釈迦が説いた教えや悟りと密接な関係を持つものです（法輪については授業でも触れました）。このような象徴的なものの対極のリアルなものの例として写真を出しましたが、これは混乱を招いたかもしれません。写真は絵よりも一般的に写実的と考えられているから出したのですが、必ずしもそうではないからです。写真を見て実際の被写体とずいぶん印象が異なることを感じることも、よくあります。別の見方をすれば、われわれにとっての印象や理想像は、現実の姿を直接表したものではなく、自分の中で特定のフィルターを通したものなのです。なお、宗教的な信仰心を恋愛感情にたとえたのは、単にわかりやすいようにというだけではなく、いろいろな宗教で実際に見られるからです。キリスト教におけるイエスへの信仰や、インドでも特定のヒンドゥー教の神への信仰は、しばしば男女のあいだの恋愛感情（とくに男性に対する女性のそれ）にたとえられます。

三十二相には他にどんなことがあげられるのですか。

三十二相は仏教美術の基本であるばかりでなく、内容的にもとてもおもしろいものです。髪の毛の螺髪（らほつ）、眉間にある白毫相（びゃくごうそう）、頭のてっぺんにある頂髻相（ちょうけいそう）、指の間にある水掻きである鬘網相（まんもうそう）、髪の生え際まで舌が届く長舌相（ちょうぜつそう）などがあります。資料を添付したので見ておいてください。なお、このような超人的な人体表現も、象徴的な表現とは違った「聖なるもの」の表現と見ることができます。これも卑近なたとえですが、昔の少女マンガで（今もそうかもしれませんが）、主人公の瞳の中に星があったり、背景に花が描かれたりするのと同じ発想です。

聖なるものを直接人の姿で表さないと言うことの心理が何となくわかりました。よく出土する勾玉や鏡が、神道のシンボルだということをはじめて知って、驚きました。

すべての勾玉や鏡が聖なるものを表しているわけではないと思いますが、全くの実用的なものであったとも言えないでしょう。勾玉を装身具として身につければ、何らかの呪術的な機能が込められていたでしょうし、鏡も同様です。その中で「三種の神器」のようなご神体となるものが現れたのです。神道のシンボルというより、神道に代表される日本人の宗教において、特定の意味を持つものの代表的なものです。このように、特定の「もの」に何らかの宗教的な意味を読みとる（あるいは与える）のは、人間の本性のようなもので、洋の東西を問わず、また古代でも現代でもかわらないようです。宗教というと、オウムや最近の「白装束の集団」のようなものをイメージするので、「宗教とはうさんくさいものだ」と思われがちですが、もともと人間というのがうさんくさいもの（非合理的な存在）なのです。

釈迦が白い象に姿を変えて乗り移る「托胎霊夢」の彫刻があったが、なぜ白なのか、何か色に意味があるのですか。また、なぜ象なのですか。インドは象というイメージがあるのですが、それはインドと仏教が深くかかわっていて、仏教と象もまた深くかかわっているからですか。（森注：他にも象が気になるという質問が多数ありました）

なぜ仏教が象と深くかかわっているかはよくわかりませんが、一般にインドでは象は神聖な動物にあげられます。古くはマウリヤ朝のアショーカ王の石柱に、聖なる動物のひとつとして、ライオンやグリフォン（有翼の獅子）などともに刻まれています。象が釈迦の伝記や前世の物語に登場することも多く、授業で紹介する酔象調伏や、前世の物語（ジャータカといいます）の中でも人気の高い「六牙象本生」などがあります。比較的身近に

いる巨大な動物が、神聖視されるのは自然なことのようにも思います。日本にもし象がいたら、やはり神聖なものとなったのではないでしょうか。アイヌの人々も熊をそのように扱っていますし、「神様の使い」のような動物は、世界中でいろいろいると思います。白についても決定的な理由はわかりません。また「白は神聖さを表す」というような普遍化も、いささか乱暴でしょう。しかし、日本でも白い蛇を神聖視したり、いろいろな地域で白いライオンや虎のような白い動物が物語の主人公になったりすることを考えると、ある程度の広がりがあるようです。医学的には「アルビノ」というようですが、稀少なことと白という色そのものが、理由として考えられます。

結局、ガンダーラとは何なのですか。

ガンダーラとは地名です。インド西北部で、現在のパキスタンを中心に、インドやアフガニスタンにも一部重なります。紀元前後頃から仏教の造像活動が始まり、仏像が誕生したところとして有名です。授業でも紹介したように、ギリシャやローマ世界などのヘレニズム的な雰囲気をそなえた仏像が特徴です。

宮治　昭　1996　『ガンダーラ　仏の不思議』講談社。

ナーガールジュナって人いますよね。地名と何か関係あるのですか。釈迦の骨って本物なんですか。インドの女性像ってすごく色っぽい。というか像がみんなスタイルがいいなと思いました。

はじめのナーガールジュナは、日本では龍樹とよばれるインド仏教の高僧です。大乗仏教の基本的な観念である「空（くう）の思想」を理論化、体系化した人物で、インド思想史上でも最重要人物の一人です。地名のナーガールジュナコンダは、この人物名に関係があると昔から言われていますが、ここが出身地であったとか活躍したという決定的な証拠は残っていません。一般に南インドが龍樹の活動領域だったようなので、実際に関係があったのかもしれません。釈迦の骨については、具体的にどれを指しているかわかりませんが、本物かもしれませんし、本物ではないかもしれません。伝説では釈迦が涅槃に入ったあと、荼毘に付してその遺骨を 8 つに分けて仏塔を建立したと言われています。したがって、釈迦の骨が存在したことはたしかなのですが、現在、舎利（しゃり、釈迦の遺骨のことです）と言われているものが、本物かニセモノかは、科学的なレベルで判断できるかもしれませんが、信仰のレベルではほとんど意味がないでしょう。それよりも、舎利に対する信仰は、「もうひとつの仏教史」とでも呼ぶことができる興味深いものです。たとえば、ある時期のインドから中国への輸出品（！）には、この舎利がたくさんあったことが伝えられていますし、日本では、平安時代、世の中が豊かなときには、舎利が自然に増えるという信仰もありました。舎利と仏塔の関係については、仏塔のところで取り上げる予定です。最後の女性についてのコメントは、まったくそのとおりです。日本の仏像で豊満な女性像というのはあまり見ませんが（ないわけではないのですが）、仏教の女尊を含め、一般にインドの女神像は豊満な肉体表現を取ります。胸や臀部が強調されたり、逆に腰が極端にくびれています。身に付けている服装も肌に密着したものが多く、体の線がさらに強調されています。性的なイメージをふくめ女性美をどのように表現するかも、文化的な背景に大きく依存しています。

お釈迦様って人から生まれたのですか。人間は仏陀になれるの？ 右の脇から生まれたのは、やっぱり人間と同じ生まれ方はタブーだから？

釈迦の母は摩耶夫人（まやぶにん）で、父は浄飯王（じょうぼんのう）といいます。摩耶夫人が釈迦を宿したのは、授業でも紹介したように、兜卒天（とそつてん）から白い象となった釈迦が降下して、右脇から入ったからと言われます。キリストと処女懐胎のマリアとの関係に少し似ていますね。なぜ右脇であるかはいろいろ解釈がありますが、よくわかりません。キリスト教やギリシャ世界で、同じような神話や伝説があることを指摘する研究者もいます。タブーというよりは、積極的な神話化と見られますが、古い時代の文献からこ

のエピソードは見られますから、かなり早くから、そう信じられていたようです。なお、キリスト教世界におけるマリア信仰のように、仏教での摩耶夫人信仰もあります。そのような意味では摩耶夫人もただの人ではありませんね。

仏像をたくさん作る仏教と、偶像崇拝を禁止するイスラムでは、根本的に何が違うのですか。

仏教とイスラム教との間では、教理、思想、儀礼、聖典、神々の体系、信仰している人と地域などなど、あらゆるものが違います。しかし、授業でも説明したように、仏像を量産する仏教と、偶像崇拝を禁止するイスラムとは、一見すると正反対のような感じですが、いかにして「聖なるもの」を表現するかという点では、同じように努力をしています。それぞれの宗教の持つ特異性とともに、あらゆる宗教に見られる普遍性を扱うのが宗教学です。そのためには柔軟な思考法が必要です。なお、インドといえば仏教というのが日本人の固定観念ですが、現在のインドには仏教徒はほとんどいません。その一方で、ヒンドゥー教に次ぐ人口を占めるのがイスラム教徒です。中世のムガール帝国以来、イギリスの植民地統治まで、インドで支配者として君臨してきたのも彼らイスラム教徒でした。

同じ神様の中にも、一般市民用みたいな下級神とかあるんですね。そうゆうのって最初に作られたときから、一般市民用だったんですか。顔がなかったり、顔だけの仏像がありますが、それはなぜなんですか。

ヤクシャや樹神、ナーガ（龍）のようなものが下級神に相当しますが、これらは古くからインドの人々に信仰されてきた「聖なるもの」です。仏教が登場したというのは、その上にかぶさったようなものなのです。仏塔などの初期の仏教美術で、このような下級神がたくさん表されているのは、仏塔を造ったり、信仰していた人々にとって、最も身近な信仰の対象だったからです。一般市民用、僧侶用というような使い分けがあったわけではなく、人々の信仰体系が重層的だったと見るべきでしょう。これは、別にインドに限ったことではなく、日本でも仏教、神道、民俗的な宗教（ムラの習慣）などが重なって存在しています。顔がない仏像は、意図的に破壊されたものも、自然に壊れたものもあると思います。意図的なものはイスラム教徒によるものが有名です（最近でもバーミヤンの大仏がありました）。首や腕は折れやすいので、保存状況がよくないと、たいてい最初に壊れるところです。

初期のインドの仏教では、釈迦を人ではなくてものにたとえるということで、木にたとえてあったりしたけれど、木にたとえられているのは何か意味があるのかと思った。木は神聖なものだったのでしょうか。

樹木崇拝は世界的に見られますが、インドでも古くからあり、現在でもインドに行くと多くの聖樹を見ることができます。釈迦の人生の中で重要な事件が起きたときには、しばしば樹木が登場します。誕生の時に摩耶夫人は無憂樹という木に左手でつかまりますし、悟りを開いたときは菩提樹、涅槃の時には沙羅双樹（『平家物語』の冒頭で有名）が舞台になります。これは単なる偶然ではなく、樹木信仰と当時の仏教が密接な関係にあったことを示すと考えられています。

洋の東西を問わず、聖なる存在は光背（光輪？後光？）を持つというイメージがあるようだが、なぜだろうか。（太陽のイメージを持つということだろうか）

たしかに光は聖なる存在と密接に結びついています。宗教以外でも「威光」とか「栄光」のように偉人や高貴な人物とも関連します。また、後光があるのは仏の身体の色が金色で光を放っているからで、このことは仏の身体的特徴（金色相＜こんじきそう＞といいます）のひとつとしてもあげられています。宗教図像の場合、さらに光は霊的、神的なものの表現としてしばしば見られます。これはおそらく、神秘体験や宗教体験がしばしば光をともなうことにも関係すると思います。ヨーガや瞑想などで、理想的な境地に到達すると、一種

の「光」を体験するようです。悟りと光は密接な関係を持っているのです。われわれにとっての光は「明るい」「暖かい」といった程度のものかもしれませんが、闇に覆われていた近代以前の人々にとって、光はもっと切実なもの、不思議なものだったはずです。また、光は聖なるものとの媒体ともなります。われわれは仏像やイコンなどの聖なるイメージを見るときには、光がかならず必要です（暗闇では見られませんから）。古代や中世の人々が教会や伽藍でこれらのイメージを見るときに、そこに介在する光は聖なるイメージそのものが放つエネルギーのように感じられたかもしれません。宗教美術を考える上で、光はさまざまな問題をはらんでいるようです。

「大乗仏教」と「小乗仏教」の大と小は何が大小なのですか。何も知らなくてすみません。これから徐々にわかっていきたいです。

質問の内容はどんなに基本的なことでもかまいませんので、気にしないで記入して下さい。さて、仏教とは悟りを獲得するための教えです。悟った人が仏陀なので、仏陀になることを目的とする宗教ということができます。われわれと仏陀の間に物理的な距離が設定し、そこに至るための「乗り物」の大きさが、大乗仏教と小乗仏教の大小です。悟りの世界に到達する乗り物（手段）が、大乗はとても大きいということです。ただし、この名前からわかるように、小乗よりも大乗の方がいいにきまっています。これは、「小乗」という呼び名が「大乗」の側から付けられた一方的なものだからです。実際に「小乗仏教」と一般的に呼ばれるものは、「上座部仏教」と呼ぶべきもので、現在、スリランカや東南アジアでおもに信仰されています。ところで、大乗仏教な立場からは、小乗仏教は自己中心的な宗教のようにとらえられますが、実際はそれほど単純ではありません。大乗仏教では誰もが「菩薩」（ぼさつ）になって、悟りを得ることができるとしますが、そのかわり、菩薩の修行期間をとても長く設定します。その一方で、上座部仏教では悟りを開く（阿羅漢になるといいます）ことは、ごく限られた人だけですが、大乗仏教のように長期の修行期間を必要としません。また、それ以外の人、たとえば在家の人は悟る可能性がないのかといえば、現世では布施などで功徳を積んで、来世でそのようなエリートとして生まれ変わることでそれを可能にします。自己中心的なだけの宗教が二千年以上も生き続けることはできないのです。

以下の文章は、別の授業で密教、大乗仏教、小乗仏教の関係を説明するために使ったものです。参考までにあげておきます。

◎密教は伝統的な仏教とどのような関係にあるのか

一般に密教は大乗仏教の中から生まれた（あるいは変質した）といわれるのですが、必ずしもそれだけではありません。仏教を含めほとんどの宗教は教えと実践という二つの要素を持っています。教え（教理）の面からは、密教は大乗仏教の直接の後継者であり、むしろ特別な発展をもたらすことはほとんどありませんでした。問題はもう一方の実践面です。大乗仏教にとっての理想的な実践をあらわすことばに「自利利他円満」があります。自分自身の知的なレベルの向上と、他者への働きかけ、具体的には慈悲による救済がともにそなわることによって、はじめて悟りが可能になるということです。「上求菩提、下化衆生」と言った場合も同様です。これは悟りを求める努力と、衆生つまり一般大衆を救済する慈悲を表すことばで、菩薩がなすべきこととしてあげられます。上と下という方向を表すことばが含まれているのも、このような菩薩の持つ二面性をよく表しています。

菩薩そのものの説明もしていなかったので、補っておきますと、悟りを開くために（つまり仏となるために）努力するものを意味し、本来は悟るまでの釈迦を指していましたが、大乗仏教ではそのような努力をするあらゆる仏教徒が菩薩とみなされます。「誰でも菩薩」というのが大乗仏教のテーゼなのです。そして、すでに述べたような「他者への働きかけ」が、従来の仏教（つまり初期仏教や上座部仏教など）よりもはるかに重視されました。このような実践はきわめて長い時間を

必要とするものでした。三阿僧祇劫（さんあそうぎこう）と呼ばれる無限に近い時間、菩薩の実践を行わなければ悟ることができないともよく言われます。極端な場合、理想の菩薩は他の人々がすべて悟りを開くまで、自分自身は悟りをあえて開かないのだという経典もあります。誰でも菩薩になることはできても、その次の仏になるのはほとんど絶望的な状況を大乗仏教は設定しているのです。その背景には仏の絶対性や超越性を押し進められた仏陀観の変化もあります。

これに対し、初期の仏教経典は、釈迦から直接教えを聞いた者たちが、釈迦と同じ悟りを開いたことをしばしば伝えています。上座部仏教の場合、釈迦と同じではありませんが、それにきわめて近い阿羅漢（あらかん）という存在になることは可能としています。そのためには戒律の遵守や高度な瞑想、きびしい修行などが必要ですし、誰でもそれができるというわけではありません。しかし、大乗仏教のように、ゴールが見えない世界とは違うのです。このような枠組みの中で密教の実践を考えた場合、選ばれた者のみが瞑想やヨーガなどの神秘体験を通して、現世で悟りを開くことができる（即身成仏）というのは、救済の形式としては大乗仏教よりも伝統的な（あるいは保守的な）仏教に近いのです。見方によっては、密教は大乗仏教の枠組みを逸脱し、近道を見つけたようなものかもしれません。ちなみに、同じ大乗仏教の枠組みを別の方法で壊したのが、浄土教です。仏の絶対性を究極にまで高め、その慈悲のみによって衆生が救済されるという考え方をします。絶対他力という言い方もしますが、大乗仏教一般から見れば、一種の「開き直り」にも見えます。これにあわせて密教をとらえれば「おきて破り」とでも言えるでしょうか。いずれにせよ、宗教の実践に見られる二方向性、つまり自己自身への努力と、他者への働きかけは、仏教の修道論や救済論を考える上できわめて有効な枠組みとなるのではないかと思います。

3. パーラ朝期の密教

高校の世界史の授業でよく耳にした「ナーランダー僧院」をはじめて目にした。こんなに大きくて立派なものだとは知らなかった。この授業を取っていなかったら知ることなく終わっていたのかなぁと思うと得した気分になる。エジプトではピラミッドを作ったように、国家事業で巨大な僧院を作ったのかと思うと、また改めて仏教の偉大さを感じる。

「得した気分」というのはたしかにそのとおりかもしれません。同じ授業料を払っているのですから、できるだけたくさんの知識を学んだ方が得です。高校までの知識は体系的ではあっても表層的で、なかなか特定のテーマを深く学ぶことはできません。教養の授業にはさまざまな分野やテーマがあります。せっかく大学に入ったのですから、自分の専門以外のことをいろいろ学んで下さい。私の授業ではスライドで仏像などをたくさんお見せしていますが、できるだけ質のよいものを選ぶようにしています。その方がよいものを見極める目がそなわるからです。巨大な寺院や建物はたしかに国家的なレベルで建造されることが多いでしょう。日本でも東大寺の大仏殿に代表されるように、壮大な伽藍は政権のバックアップなしでは作り出せません。しかし、そのことがかならずしも仏教の偉大さを示すものではありません。むしろ、国家や政権と結びついた宗教はしばしば危険な様相を示します。イラク戦争におけるブッシュ大統領とキリスト教などは、最近のマスコミでもよく取り上げられます。また、建物を作る指示を出したのは為政者であっても、その制作に実際に携わったのは無数の民衆であることも、忘れてはいけないと思います。

酔象調伏の絵を見て、ひとつの絵に時間的に異な

る状況を描くというのは、日本の絵巻の中にも似たような表現があったような気がして、何か関係があるのだろうかと思いました。（森注・他にも日本の絵巻物との関連を指摘してくれた方が数名いました）

ご指摘のとおりで、ひとつの絵に時間的に異なる状況を描く「異時同景図」は、日本の絵巻物の常套手段です。詞書きなどで切れ目を示すこともありますが、基本的にひとつの画面に複数の時間帯を表します。そのため、登場人物がひとつの画面に何度も現れることになります。しかし、このような手法は、けっしてインドの仏教美術や日本の絵巻物に限られているものではなく、説話的な内容を持つ絵画に普遍的に見られるものです。ヨーロッパの絵画はもちろん、未開民族の素朴な絵などにも広く現れます。むしろ、特定の決まった瞬間の、特定の視点のみから見た状態を描くという、われわれが学校の写生などで描く方法は、きわめて特殊な絵画なのかもしれません。発想の転換が必要なのです。次の文献は、絵画とは現実を切り取ったものではなく、フィクションつまり架空のことであるという視点からの、興味深い文献です。ちなみに執筆者の一人は建築家です。

千野香織、西　和夫　1991　『フィクションとしての絵画』ぺりかん社。

仏教の世界では天上界と地上界とあと何があるのですか。

「三界」とまとめて呼ばれ、欲界、色界、無色界からなります。地上や地獄、一部の天は、はじめの欲界に含まれます。仏教の宇宙観については、仏塔の時に詳しくお話しします。

「菩薩」という言葉を今までよく聞いてはいたけど、仏になるために修行していると聞いて奥が深いなぁと思った。そういう階級みたいなものはどれくらい仏教の世界にあるんですか。

仏教の仏たちの世界の内容については、次回の「仏教のパンテオン」で取り上げますが、上から順に仏（如来）、菩薩、女尊、明王、天などがグループ名としてあります。これの前に固有名詞である釈迦や観音、不動などがつきます（釈迦如来、観音菩薩、不動明王）。余計なことですが、皆さんの出席カードのコメントに「奥が深い」という表現がよく現れるのがおもしろいと思います。とくに宗教を対象にしているからかもしれませんが、どんな学問も基本的に「奥が深い」ものですし、反対に「底の浅い」と言われれば、当然、あまりうれしくありません。しかし、何がどのように「奥が深い」のか、なぜそう思うのかというところまで踏み込んで考えると、問題意識がより明確になります。

また寝てしまった。涅槃に入ったものとみなして下さい。マトゥラーの仏塔の目は全開でしたが、普通のは半開きで、上は天界、下で人間界を見てると聞いたのですが、マトゥラーのはどうなんですか。

世の中にはたくさん仏像の入門書や仏像辞典のようなものがありますが、ときどきあてにならないものや、かなりあやしいものも見られます。それを有名な学者や仏師が書いていることもあります。仏像の目が半開きであることの説明に限らず、いろいろな解釈が仏像の姿や形にあたえられるのはしかたがないのですが、それがどこまで妥当であるか、その典拠は何かを確認することが学問としては必要です。なお、涅槃に入っても、できるだけはやく娑婆世界に戻ってきてくれるとありがたいです。

チベット仏教は密教なのかと疑問に思った。インドから伝わった仏教が個々の地域性によってかわることはあるのだろうか。

チベット仏教イコール密教ではありませんが、チベットの仏教のほとんどの宗派は、密教の要素を持っています。とくに「古派」という意味のニンマ派は顕著です。インドで生まれた仏教がアジア諸地域でどのように受容され、変容していったかは、アジア各地の仏教を考える上で大きな問題です。それぞれの地域でのあり方が、その地域の人々の文化や宗教観を如実に示すからです。次のような叢書もあります。

『佛教の受容と変容』全５巻　佼成出版社。

母の摩耶夫人は釈迦を産む前は普通の人だったのですか。釈迦を産んだのだから、人ではないかもしれないが、産んだことによって神となったのであれば、人でも神でもないのですか。

基本的に摩耶夫人は人です。インドでは輪廻思想が基本で、人も輪廻するのですが、神々の世界も輪廻の中に含まれています（天といいます）。摩耶夫人は釈迦を産んだあと数日でなくなり、次に生まれ変わったのが天界だったのです。その時点では神になっています（キリスト教やユダヤ教的な意味の神ではありません）。ただし、前回の回答でもふれたように、摩耶夫人信仰はたんに釈迦の母であることや、天の住人であるというだけではなく、「母なるもの」であることが重要だったようです。その結果、摩耶夫人への単独の信仰やさまざまな神話を生み出しました。八相の中の三道宝階降下のエピソードも、その一つです。また、釈迦が涅槃に入る直前に、摩耶夫人が天からおりてきて、これに対して、臨終の釈迦が起きあがるという物語も、経典の中にあります。この話はわが国で「釈迦金棺出現図」という有名な絵画をうみました（国宝・京都国立博物館所蔵）。

今日の講義には関係ないんですけど、仏教はインドで生まれたのに、今のインドはイスラムかヒンドゥー教だったと思うんですけど、どうして仏教誕生の地が違う宗教にかわってしまったのですか。

簡単に言ってしまえば、インドの宗教の中で仏教は異端の宗教だったからです。それは仏教が最高神の存在を認めず、あらゆるものの実在を否定したからです。逆に、インドで正統的な宗教は、ブラフマンと呼ばれる宇宙の根本原理や、ヴィシュヌやシヴァのような人格神を認めています。そして、この世界を、このような神々が顕現したものと考えます。仏教がなぜインドから姿を消してしまったのかという限定的な問題については、さまざまな説があります。たとえば、イスラム教の侵攻、支持基盤の喪失、ヒンドゥー教との違いが不明確になったことなどがあげられます。

三十二相がすべて表現された仏は存在しないのですか。この三十二相はいつ頃から考えられたとか、それぞれに意味はあるのかとか、わかっているのですか。32 という数には意味はあるのですか。33 は重要な数だとは聞いたことがあるのですが。

三十二相の中には実際に表現できないものや、具体的な形態ではないものも含まれています。肉髻や螺髪のように比較的、表現しやすいものを中心に、一部が実際の仏像に表されていると見るべきでしょう。三十二相は「阿含」（あごん）とよばれる初期の仏教経典にも現れ、かなり早い時期に成立したようです。大乗仏教の多くの経典にも登場しますが、三十二相の内容は文献の間で必ずしも一定しないようです。仏教辞典などでは『大智度論』のような、かなり後世の百科辞典的な文献にあげられている三十二相をしばしば紹介しています。32 という数の意味は、経典などには明記されていないようです。一般的な解釈ですが、32 はは 2 の 5 乗という「整った数」なので、一種の聖なる数とみなされたのでしょう。仏教には四諦八正道や十二支縁起、菩薩の十地のように、重要な項目に数がしばしば現れます（というより、むしろ数が限定されていないものがほとんどありません）。とくにどの数を仏教が重視したということはないようです。

三十二相のうちの白毫相では、なぜ眉間の白毛は右旋なのですか。仏像でも釈迦の従者も左右にいますが、仏教において右や左はそれぞれ何かの意味を持つのでしょうか。また、32 や 80 などの数は 7 のような意味を持つのですか？仏教ではあまり偶数を好まず、奇数を大事にすると聞いたことがあるので不思議です。

基本的にインドは右を左よりも優位におきます。これはインドに限らず、世界中でほぼ普遍的に見られることです。この問題を扱った人類学の古典的な著作に、エルツの『右手の優越』という本もあります。釈迦の時代のインドでは、高貴な人に対し、右遶（うにょう）という挨拶の方法があります。対象が自分の右にくるように、右回りに回

ります。このような対象には釈迦のようなものばかりでなく、仏塔などの建造物もあてはまります。仏塔の周囲には右遶道と呼ばれる道があり、信者はその周りを右回りに回って礼拝したようです。脇侍の位置ですが、実際の作例を見る限り、とくに左右に優劣を付けているのではないようです。数については、すでに上でも述べたように、仏教ではいろいろな数が登場しますが、とくにどの数字が重要であるということはありません。37、64、108 などは、例外的によく知られた重要な数です。仏教が奇数をとくに大事にするということはないと思います。

「仏は何を食べても最上の味である」と三十二相の味中得上味相にありましたが、仏は何を食べるのですか。

何を食べるのでしょうね。釈迦を含む当時の出家者集団は、托鉢によって食事を得ていましたから、釈迦だけが特別なものを食べていたわけではありません。実際は悟っているのですから、何も食べなくてもいいのかもしれませんが、仏典ではあちこちで布施として食事をもらっています。涅槃、つまり亡くなる直前には、チュンダという信者から特別な食事をもらって食べるのですが、その後、体調を崩したことになっています。合理的に考えれば、もう 80 歳の年寄りだったのですから、なれないものを食べたのがよくなかったのかもしれません。このときに食べ物の内容は、キノコとか、豚肉とかいろいろな解釈があります。このエピソードを含む『涅槃経』は、釈迦の最期を淡々と記述する経典で、読むものの胸を打ちます。

仏教が一神教ではなく多神教なのは、キリスト教やイスラム教とルーツが違うからなのですか。

キリスト教とイスラム教、そしてそれらよりも古いユダヤ教は兄弟のような関係にある宗教で、まとめて「砂漠の宗教」とも呼ばれます。いずれも至高的な存在として絶対神をたてる点がが共通しています。仏教はこれらとは明らかに成立の背景も性格も異なる宗教です。ただし、宗教の入門書などで宗教を分類して説明するときに、一神教と多神教という区別はよく目にしますが、ひとつの宗教をこのうちのいずれかに分類するのは、実はかなり困難です。仏教でもパンテオンの総体を見れば多神教とすべきでしょうが、これらのすべての仏は大日如来に帰一するというような立場をとれば、一神教になります。このような仏教における絶対的な存在を「法身」（ほっしん）といいます。

インドの仏像は仏のまわりにたくさん人がいるなと思いました。でも坊主の人（僧）はいないなぁと思いました。仏塔を仏塔でデザインすることにはどんな意味があるのですか。

たしかに、バールフットの三道宝階降下の浮彫などでは、当然いるべき出家者たちが表されていません。釈迦を人間的な表現では表さないことと、このことを結びつけて考える研究者もいますが、その理由ははっきりわかりません。ただし、ガンダーラでは釈迦のまわりにしばしば弟子たちの姿が表されます。仏塔を仏塔で装飾することの意味も、明確ではありません。とくにアマラヴァティーとナーガールジュナコンダという南インドの遺跡で流行したようです。仏塔という装飾モティーフそのものはサーンチーやバールフットなどの北インドの仏教遺跡でも好まれましたが、入れ子式にはなっていません。南インドの仏教徒たちは独特の仏塔観を持っていたのかもしれません。

密教においては釈迦は如来の一部としてマンダラによく描かれますが、大日如来の変化法身としての存在を釈迦とするのであれば、密教は「仏教」とはいえないのではないでしょうか。密教が仏教である理由を知りたいです。

釈迦と大日如来の関係は、仏教における「仏身論」になります。大乗仏教で真理そのものを仏とみなした「法身」が現れると、歴史上の釈迦は「変化身」あるいは「応身」となります。これは法身が実際に人間の姿をとって衆生の前に現れたものです。このほかにも「報身」とよばれる阿弥陀如来のような仏もいます。大乗仏教の仏身論は、空間的にも時間的にも無限の世界に現れる無数の

仏たちを、どのように関係づけるかを追求した結果です。密教の仏陀観も基本的に、このような大乗の仏身論を継承したものです。密教が仏教である理由は、彼ら自身がそのように主張したからですし、教理的には大乗仏教の伝統をそのまま受け継いでいます。ただし、大日如来のような一種の人格神をたてたのは、本来の仏教からは逸脱しています。私の先生のひとりは、密教はヴェーダーンタ（インドの正統的哲学学派の名で、梵我一如を主張する）と何ら変わらないと言っていました。なお、釈迦を中尊とするマンダラはほとんどありません。胎蔵マンダラには釈迦院があって、そのなかに釈迦も描かれますが、どちらかというと脇役のような部分です。

パーラ朝の仏教は、僧院を中心としていたが、他の王朝では仏教の中心はどこなのか。

パーラ朝以前でも僧院を中心としていました。ただしパーラ朝の僧院は、それまでのものとはくらべものにならないほど規模が大きく、しかも王朝の支援のもとで活動していたようです。逆に、王朝の衰退が、インドにおける仏教の弱体化をもたらしたようです。

5 月 4 日に両親が京博に行ったのですが、すごい人で、ゆっくり仏像等が見られなかったそうです。父親は途中で挫折したそうです。行くか行くまいか考えてしまいました。いろいろな意味で。

それは残念でした。先週「招待券あります」と宣伝した二つの展覧会のうち、京博の「空海と高野山」展のチケットは、研究室にわずかしか残っていなくて、希望者の方に十分分けることができず残念でした。もう一方の「マンダラ---チベットとネパールの仏たち」は、まだかなり残っていますので、希望者は文学部の研究室まで来て下さい。仏像の展覧会は静かなところでゆっくり見たいものですね。話題の展覧会になってしまうと、なかなかそれはかないませんが。「空海と高野山」展はこの先 1 年近くかけて、東京、名古屋、和歌山を巡回します。名古屋や和歌山あたりは穴場ではないかと思います。機会があればそちらへどうぞ。

4. 日本密教の源流？

同じ仏教だからインドと日本の仏像が似ていて当たり前だと思っていたけど、よく考えたら、何千キロもさまざまな民族を経由してもイメージが伝わっているのはすごいことだと思った。

前回の授業のテーマは「似てる？似てない？」でした。感想やコメントにも「よく似ていて驚いた」というものが多かったようで、似ていることを実感できてよかったと思います。授業でも考えてもらいましたが、インドから日本に仏像のイメージが伝わる間には、気の遠くなるような距離があるにもかかわらず、よく忠実に伝えられたものだと思います。直線距離であれば、ネパールから中国へというのが一番短いでしょうが、ヒマラヤを越えられなければならないので、授業でお話ししたような迂回路を取ります。シルクロードとして有名ですが、南海を経由するルートも「海のシルクロード」として知られています。いずれにしても、飛行機もインターネットもない千年以上前のことなのです。「似ているか似ていないか」というだけの問題であれば、結論は簡単ですが、このような状況の中でなぜ似ていることが可能であったのか、そもそも、似ているのはどういうことなのか、逆に似ていないものがあるのはなぜか、などの問題を今回少し考えてみます。

インドと日本はものすごく離れているのに、よく似た仏像がたくさんあってびっくりしました。日本独自の仏像は少ないみたいですが、日本がインドの仏像をまねて作ったのですか。それとも仏像を作る上でマニュアルみたいなものがあるのです

か。

前の方とよく似た感想ですが、後半の「マニュアルみたいなもの」についても今回取り上げます。仏教はそもそも外来の宗教なので、日本独自の仏像はたしかに少ないのですが、神道や民間信仰と混淆して、日本固有の神格もいくつか現れます。また、仏教の仏と神道の神が本来は同一のものであるという「本地垂迹説」なども登場します。「聖なるもの」についての考察は、いつの時代でも宗教の中心的な課題です。

仏像の足の下にはなぜいつも人や馬、龍などの像があり単独の仏像はないのか。

単独の仏像はないわけではありません。しかし、仏教も含め、インドの神の像に、動物や人物を台とするものが多いのもたしかです。降三世明王が二人の人間を踏みつけていることに、驚いたというコメントもありました。踏まれているのはヒンドゥー教の神のシヴァとその妻です。たしかに異様な姿ですね。仏教の神がヒンドゥー教の神よりも優位にあることを表すのですが、インドの美術の伝統から見ると、それほど単純ではないようです。これについては教科書の最後の章で考察しているので、読んでみて下さい。授業でも終わりの方で取り上げる予定です。

素朴な疑問なのですが、インドで起きた仏教は長い長い道のりを経て日本にたどり着きました。それまでの過程で伝わったはずの仏教は、他国では儒教やキリスト教へとかわっていて、ほとんど残っていないのに、どうして日本ではこんなにも深く受け入れられたのでしょうか。日本人の気質や、もともと、多くの神や仏を信じていたためですか（今になってとても不思議でしかたありません。しかも、細かな点までよく似ているので、すごいことです）。また、仏像の姿などを忠実に伝承しているのに、インドではそうでない従者などが日本で観音となったりと位が変化するのはなぜですか。本でも猪は出てきますが、なぜ猪である必要があるのですか。

なぜ仏教は日本で受容され、根付くことができたのかというのは大きな問題です。指摘されているように、日本人固有の宗教観や心性もその理由に挙げられるでしょう。あるいは、仏教が国家権力と結びついたことも大きな要因でしょう。仏教の伝来そのものも国家的なレベルのことでしたし、奈良時代や平安時代の仏教が朝廷や貴族と密接な関係を持っていたこともよく知られています。現在の日本仏教のかなりの宗派は、鎌倉時代に現れたいわゆる「鎌倉新仏教」にその起源を持っています。これらの仏教は「庶民のための仏教」のようにしばしばとらえられますが、けっして国家や権力と無縁だったわけではありません。もちろん、宗教とは個人の信仰を基礎においたものですから、民衆の観点からの考察も必要です。ところで、東南アジアやチベットなどでは、現在でも仏教は生きていますし、日本以上に人々の生活に密接に関係しています。しかし、その一方で、日本と同じように、国家レベルで仏教が導入されたり、既存の土着的な宗教と結びついたにもかかわらず、現在ではほとんど姿を消した地域もあります。いずれにしても容易に答えを出せる問題ではありませんので、自分でもいろいろ考えてみて下さい。仏の世界の位の変化については、今回取り上げます。猪については、「なぜ猪？」という質問が他にも見られました。教科書の「大日如来」の章でも取り上げられていますが、太陽や絶対者と結びついた動物と考えられています。もっとも「なぜ猪でなければならなかったのか」という疑問は残りますが。

本を読んで授業を受けるとよりわかりやすくなりました。今回、レポートを書いてみてよかったと思います。インドからはるばる日本まで忠実に伝えられているところがすごいと思った。

レポートの課題は負担に思う方も多いでしょうが、読むのと読まないのとでは、実際の授業の理解がまったく違ってきます。そのため「書いてみてよかった」と思ってもらえるのはうれしいことです。「授業の前に読んでおきなさい」という指示程度でもいいのですが、なかなかそれだけでは、読んでもらえないので、課題にしています。自分で言

うのも何ですが、各章ごとにまとまりをつけつつ、全体でも流れができるように構成されるなど、けっこうよく考えて書いてある本です（少し誤植があるのが申し訳ないのですが）。

現在のインドの人々は、大多数がヒンドゥー教を信仰している中で、「密教」を信仰している人々はいるんですか。

ほとんどいません。ただし、インドの内部にはカシミールやシッキムのようなチベット文化圏が含まれますので、その地域では密教の要素を含むチベット仏教が信仰されています。中世のインド密教の伝統は、インドの国内ではほとんど消滅しています。13 世紀の初頭にはほぼ壊滅状態になったようですが、その後しばらくは持続したようです。現在のバングラデシュには、その流れを汲む宗教が現在でもわずかに残っているそうです（詳しいことはわかっていませんが）。なお、インドの宗教はヒンドゥー教と考えがちですが、イスラム教徒が人口のかなりを占めますし、キリスト教もさかんです。

・釈迦の八相図等を見ていると、年齢による身体の変化が見受けられません。どうしてでしょうか。
・女尊と他の仏たちの肉体、容姿にあまり違いを「胸以外」感じません。どうしてなんでしょうか。
・これは授業とはまったく関係ないことなんですが、私は「スジャータ」のトラックを見たことがいっぱいあるんですが、製品はあまり見たことありません。微妙です。（これは見なかったことにして下さい）
・「涅槃」と「入滅」はどう違うのでしょうか。

年齢による身体の変化が見られないのは、インドにおける宗教図像の特質として重要だと思います。われわれは絵画や彫刻などの芸術品を、対象に似ていること、たとえば「ほんとうにそっくり」とか「まるで生きているようだ」と思うことを、ひとつの理想と考えがちです。これは「写実性」「リアリズム」ということばでも呼ぶことができますが、宗教美術に関しては、必ずしも重視されません（宗教美術以外でも同様なことはありません）。むしろ、決められた形式を守ることの方が「聖なるもの」を表現するのにふさわしいと考えることが多いのです。これは、仏教だけではなく、キリスト教などの他の宗教美術でも認められることです。キリスト教美術の場合、ルネッサンスにおいて、ギリシャ彫刻のような古典世界的なイメージが支配的になったという、特殊な条件があります。このような宗教美術にみられる形式性の重視は、以前取り上げた「聖なるものの象徴的表現」や、前回の「なぜ似てるのか」とも結びつく問題です。女尊をふくめ仏たち相互のイメージがあまり変わらないことについては、次回の授業で考える予定です。「見なかったことに云々」と言われると、よけいにコメントしたくなりますが、スジャータはたしか「名古屋製酪」（あるいは略称の「めいらく」が会社名？）という会社のコーヒー・クリーマーの商品名だったと思います。最近は他の会社のものに押されてシェアがあまりないのかもしれません。名古屋の会社なので、地域的なかたよりもあるのかも。どうでもいいことですが、以前に私の住んでいた近くにこの会社の工場があったので、数十台のトラックがならんでとまっているところをよく見ました。最後の質問の「涅槃」と「入滅」は同じことです。

マンダラの仏との比較がおもしろかった。本物でなくてもいいから、カラーでじっくりマンダラを見てみたいと思った。ところで馬頭と同じように牛頭の仏はいるのですか。

マンダラは授業の中で取り上げます。そのときに全体像や構造、意味するものなどをお話しします。本物のマンダラは展覧会などでときどき見ることができます。以前から紹介している京博の「空海と高野山」展では、有名な血曼荼羅をはじめ、何点か出ています。写真集や美術書でも見ることができますので、図書館などで探してみて下さい。私の研究室の文学部比較文化研究室にも何点かあります。牛の頭の仏は、チベットやネパールで信仰されているヴァジュラバイラヴァ（マヒシャサンヴァラとも言います）が有名です。ただし、この仏の頭は牛ではなく、水牛です。教科書の文殊

の所でも取り上げていますが、文殊や大威徳明王とも密接な関係がある仏です。また、日本で仏教と神道が混淆してから現れたと思いますが、牛頭天王（ごずてんのう）という神様もいます。このような仏は垂迹神と呼ばれます。牛頭天王はとくに疱瘡（天然痘）の疫病神、つまり、病気をもたらすとともに、それからも守る神として知られています。文殊やそれと関係を持つ女神たちが、インドで天然痘の神として信仰されていたことを考えると、なかなか興味深いです。

不動明王に対するインドと日本の信仰の差はどうして生じるのでしょうか。

不動明王がインドに起源を持つことはたしかなのですが、インドでも、その流れを汲むチベットやネパールでも、この仏は日本ほどには信仰されませんでした。不動明王を日本密教がきわめて重視した理由には、大日如来の化身と考えられたこと、他の明王に比べてイメージがわかりやすかったこと、護摩という儀礼と結びついたこと、空海などが重視したこと、感得と呼ばれる独自の宗教体験と結びついたこと、不動の瞑想が日常的に行われたことなどが考えられます。なお、後期の文学部の「仏教文化論」という授業で、不動明王と大日如来を取り上げて、仏教文化の伝播や地域性を考える予定です。

五智如来の後ろの宝珠型のもの（森注・実際は絵が描いてある）は何を表しているのでしょうか。高校の日本史で奈良時代の仏像に不空羂索観音像があったのですが、これとウダヤギリのとは何か関係があるのでしょうか。

五智如来の後ろのものは「光背」（こうはい）と言って、ほとけから発散される光をあらわしたものです。頭の後ろに円形の板を当てることもありますが、これは「頭光」（ずこう）といいます。いずれも、仏の三十二相のひとつである「金色相」を表しています。インドの仏像でもこれらは見られます。奈良時代の不空羂索像は、おそらく授業で紹介した東大寺のものか、唐招提寺の像かと思います。日本への密教の本格的な導入は、平安時代初期の空海と最澄以降ですが、すでに奈良時代から断片的に密教の経典や仏像が入ってきています。不空羂索観音もすでにそのころ伝えられています。興味深いのは、日本の不空羂索観音像は八臂を持つことが多いのですが、インドでは四臂が一般的です。そもそもインドには八臂の観音像そのものがほとんど存在しないのです。同じ仏でも日本とインドで異なるイメージを持つひとつの例です。

同じ像の中にたくさんの物語があって、こんがらがんないのかなと思う。同じ像じゃなく、いくつかの像に分ければもっと見やすそうだなと思う。なぜ同じ像の中に描いたのかが知りたい。

たしかにそのとおりで、古い時代のバールフットやアマラヴァティーなどでは、ひとつのパネルにはひとつの物語しか表されないのが普通でした。ただし、これらのパネルは仏塔を飾っていたので、仏塔全体では複数の物語が表されています。そうなると、全体の配列や順序が何を表しているかが問題になります。また、これらの物語は実際に参拝に来た人々にはよくわからないものもあったかもしれません。そのため「絵解き」をするような僧侶もいたという人もいます。パーラやその前のサールナートの八相図や仏伝図は、選ばれる主題はかなり固定化されていたようです。一枚のパネルに八相すべてを表すのは、この八つの場面がとくに重要であったとも考えられています（教科書の第一章参照）。これらの作品ではほぼ例外なく、涅槃の場面や仏塔が一番上に置かれています。これも、おそらく涅槃の持つ重要性を反映したものです。

僧院では何をしていたのですか。

修行です。経典を読んだり覚えたり、瞑想や儀礼もしていたでしょう。学んだことをもとに、論議もします。一般の信者も参拝に来ていたので、彼らのために説法をしたり、儀礼をしたこともあったはずです。その一方で、僧院という巨大な組織を運営するためには、社会的や経済的にもしっかりしたシステムがあったはずです。実際、ナーラ

ンダーなどの大僧院は、多くの土地を所有し、そこからの収入で維持されていたことがわかっています。最近の仏教の研究では、律とよばれる僧侶の生活規範を定めた文献を中心に、僧院を含め仏教の実態を解明する試みが行われています。下記の本はその代表的なものです。なお、インドの僧院の伝統は現在のチベットの僧院にかなり残っているようです。
ショペン、G.　2000　『インドの僧院生活』小谷信千代訳　春秋社。

前々から思っていたのですが、インドの仏像は日本の仏像とは違って、石板などに彫刻されたものが多いですよね（浮彫みたいな）。これはなぜですか。やはりインドの仏像の方が日本よりも複雑だからですか。あと、今日はもう少し左の方に立って説明してほしかったです。スライドが見えにくかった。
別にインドの仏像の方が日本よりも複雑ということはないでしょう。単純な比較はできませんが、木を刻んで作ったり、乾漆像などもある日本の仏像の方が、細部の表現などでは複雑化しているようです。インドでは神の像の素材に石が好まれます。ブロンズやしんちゅうなどの金属製もよく用いられたようです。その理由のひとつは宗教的なもので、神の像は永遠に存在する必要があると考えたからです。木像や塑像は加工は容易ですが、壊れやすいという難点があります（ただし、いずれも現存するものが少ないだけで実際はあったらしい）。別の理由として、寺院との関係もあります。インドの寺院は石を積んでできていることが多いのですが、神や仏の像はその一部として組み込まれます。これらの像はそれを安置する空間と切り離しては存在しなかったからです。なお、スライドについてはこちらも気を付けますが、見えにくいときは、見えるところに移動して下さい。授業中にすわる位置を変えるのは気にしませんから（勝手に教室を出ていったりするのは気にしますが…）。

金剛法菩薩は密教になってからは聖観音になるという説明がありました。教科書にも密教の時代になると毘盧遮那如来は大日如来になるというようなことが書いてあり、いまいち意味が分からないと言うか、すっきりしないままでいたのですが、「密教になると」とはどういうことですか。名前が変わるだけですか。
はじめの「金剛法云々」は逆で、従来の観音が胎蔵マンダラや金剛界マンダラに組み込まれるときに、「金剛法」という名称が与えられました。それはともかく、同じ仏が名称や姿を変えることは、たしかにわかりにくいです。大乗仏教やそれ以前からすでにさまざまな種類の仏たちが信仰されてますが、密教の時代でもその大半は引きつづき信仰されます。しかし、その場合、名称や姿が変わったり、今回の授業で取り上げるように、位や重要性がかわることもしばしばあります。毘盧遮那如来と大日如来は、名称は同じ vairocana なのですが、大乗仏教の『華厳経』では毘盧遮那と訳され、密教の時代には大日と一般的に訳します（原語が mahā-vairocana にかわることもあります）。これは、同じ名称の仏でもその性格や位置づけがかわったからです。その一方で、密教の時代になってから、新しく登場する仏たちもたくさんいます。仏たちを見ることで、仏教のあり方がわかるのです。

5.　パンテオンの構造

パンテオンとはいったい何なのか。
授業で言ったはずですが、「神々の世界」という意味です。語源的な説明をすれば、「パン」は「すべての」を、「テオン」は「神、あるいは神に関する」という意味です。世界の宗教の多くは、神や仏などの超越的な存在を前提としています。

ずいぶんいろいろな種類の神々がいるのだとおどろきました。仏には女性がいなくて女尊が出てきたと言われたけれど、それなら明妃というのは何なのでしょうか（仏のパートナーらしいというのはわかりましたが）。

狭い意味での仏は「ブッダ」すなわち「悟った人」を意味する男性名詞です（サンスクリットにはドイツ語などと同じように、名詞に性があります）。そのため、ブッダであればすべて男性で、もし女性の「悟った人」であれば「ブッダー」になります。初期仏教から大乗仏教までは、ブッダはこのようにすべて男性でした。『法華経』の「変成男子」という有名なエピソードは、女性の修行者が最終的にブッダとなるときに、男性に変わるというものです。しかし、密教の時代にはあらたに女性の「聖なるもの」すなわち女尊が登場します。これは、男性の「聖なるもの」に仏、菩薩、明王、天がいたように、仏と同格の女尊や、菩薩に似た女尊など、さまざまなものがあります。明王のように多面多臂の忿怒形の女尊もいますし、もともと、ヒンドゥー教や民間信仰の神々である天のクラスは、女尊の種類も豊富です。明妃はこれらの女尊の中で位の高いもので、仏のパートナーにあたります。仏たちは人間と同じように、家族に相当するものを構成することがあり、そこでは「仏母」と呼ばれることもあります。また、別のグループとして、「陀羅尼」とよばれる一種の呪文を神格化した女尊たちもいます。「陀羅尼」ということばが女性名詞なので、女尊と結びつけられます。これについては教科書のコラムを参照して下さい。なお、仏教におけるこのような女尊信仰の背景には、インド全体における女神信仰の隆盛があると考えられています。

仏像のイメージを伝達するためのテクストを見られるような場所はどこかありますか。

仏像のイメージを伝えてくれるのは、仏教文献です。釈迦の像であれば「仏伝」と呼ばれるジャンルの文献で、とくに三蔵の中の律と経の中に数多く含まれます。密教の時代であれば、経典にも多く含まれますが、注釈書や儀軌類などの論書にあたるさまざまな文献に含まれます。金沢大学の中では、仏教関係の文献は、私の所属する文学部比較文化研究室にもかなりそろっていますし、図書館の地下にある「暁烏文庫」が充実しています。仏教文献の説明は授業ではできないと思います。関心があれば、次のような参考文献を読んで下さい。

渡辺照宏　1967　『お経の話』（岩波新書）　岩波書店。

パンテオンの仏の部のうち、守護尊に秘密集会という仏がありますが、これはいったいどんな仏なのでしょうか。名前に興味がわきます。あと NHK スペシャルで「文明の道」というシリーズがあり、次回はなんと仏教と仏像に関する内容とのこと、予告を見ながら、この授業で学んだことを思い出していました。

秘密集会は「ひみつしゅうえ」と読みます。『秘密集会タントラ』というインド密教史の中でも重要な位置を占める経典に説かれる仏の名前ですが、残念ながら仏像などは日本には伝えられていません。チベットではとても人気が高く、この仏を中心とするマンダラも遺されています。マンダラを授業で取り上げるときに、紹介します。なお、この文献は最近全訳が発表されたので、簡単に読めるようになりました（松長有慶　2000　『秘密集会タントラ和訳』法蔵館）。NHK スペシャルではガンダーラを取り上げると思います。見られる人は見ておいて下さい。NHK は昔から文化遺産や仏教に関するドキュメンタリー（というかカルチャー番組）が得意で、「シルクロード」や「大英博物館」などでも、このあたりのことを取り上げています。

仏たちの印はそれぞれ意味はあるのですか。見返り阿弥陀は初めてみたけど、優しい雰囲気がしていて気に入りました。インドの仏はなぜか細身なのが多いですね。これも文化的背景に関係しているのでしょうか。

それぞれの印には意味があると考えるのが適当ですが、あらゆる時代や地域をこえて、それが常に

一定であるということはありません。また、同じ意味を別の印が示すこともあります。たとえば、授業でよく取り上げる「初転法輪」の場面では「転法輪印」（あるいは「説法印」ともいう）という印を示すことが多いですが、古い時代には別の印が見られますし、大日如来が示す智拳印が、この転法輪印からできたという説も有力です。印の歴史は仏像の歴史にほぼ重なりますが、印をどのようにとらえるかは、それぞれの時代や地域で異なります。たとえば、浄土教で重要な役割を果たす来迎の阿弥陀は、往生するもののレベルにしたがって 9 種類の印を示しますが、これは密教ではほとんど継承されていません。細身の仏像は授業の中心を占めるパーラ朝の仏像に顕著です。これより前の時代には、もっと堂々とした体格の仏像もあります。

菩薩や観音の名前をやったけれど、あんなにいるなんてびっくりした。七福神も同じようにあるのですか。

七福神はインド、中国、日本の神々の寄せ集めです。インド起源の神は弁財天、大黒天、毘沙門天、中国起源は福禄寿、布袋、寿老人、日本が恵比寿です。大黒天はインド起源ですが、その姿は大国主の尊（因幡の白ウサギで有名）の影響があり、インドの大黒（マハーカーラ）とは異なります。七福神の研究もいろいろあります。

インドに薬師如来がいないことが気になった。インドが起源ではないものもあるんだなと思った。

インドに薬師の作例は残っていませんが、インドで成立した仏です。サンスクリットで vaiṣajya-guru といい、「医療の王」という意味です。インド起源の仏でもインドに作例が残されていないものがあります。薬師の場合は中国やチベットでも流行し、多くの作品が作られました。

・「機械」はたしかに便利ですが、大切なものが捨てられてゆくような気がしてなりません（出席カード機の存在を否定するわけではありません）。そのうち、先生と生徒が「面授」せずに授業が行われるようになるかもしれません。私はイヤです。

・考えてみれば、日本の仏教は密教と密接な関係にあると思った。「鎌倉新仏教」しかり、「真言」「天台」しかり。勉強になりました。

・「神々の世界」の図はわかりやすいんですが、「天」は一番下級なのでしょうか。「仏」は「神」の上にある存在なんですよね。

・ちょっと私語が多いかもしれません。集中できません。よろしくお願いします。

出席そのものを機械でとるのは、最終的な集計の合理化や、毎回の出席の確認で、長期欠席者をはやく把握できることなどのメリットがあると判断したので、はじめてみました。ただし、出席カードそのものは、みなさんのコメントや質問を知りたいので、継続します。また、機械のデータそのものをあまり信用していないので、万一、データが消失したときのためのバックアップのためでもあります。日本文化における密教の重要性は、高校までの歴史の授業などではあまり強調されませんが、宗教にとどまらず、広範な領域で認められます。鎌倉新仏教の開祖たちがすべて天台系であったことにも注意すべきでしょう。「天」については、仏教内部では「護法尊」つまり仏教の教えを守る役割の神であるので、位置づけは低くなります。「天」に相当することばは「デーヴァ」ですが、これは絶対神や最高存在の神を表すものではありません。私語については私も気になっています。大学生なのですから、みなさんの自覚にまかせようと思っていましたが、なかなかよくならないようです。私語を続ける学生には退室を命じることにします。近くの席で私語を続ける学生がいたら、あなたがたからも注意して下さい。このほか、先週も注意しましたが、途中退室についてもきびしく対処します（こういうことを書かなければならないのは、悲しいというか情けないことなのですが…）。

五十六億七千万年後にこの世に下生する弥勒は地球が存在するうちに来られるのでしょうか。つーか、どうして五十六億七千万年後って中途半端な時間に決まったんですか。授業に関係なくてすい

ません。
仏教ではわれわれが想像をはるかに超える時間論や宇宙論を持っています。これについては近いうちに授業でお話ししますが、その中では五十六億七千万年なんて、たいした時間ではありません。この数字がどこから来たのかは、私もくわしく調べていませんので、調べておきます。なお、教科書で一桁間違えて伝えられたと書きましたが、私自身も間違えていて、五億七千六百万年後というのが、正しい数字のようです。訂正しておきます（どちらにしても、地球はともかくわれわれが生きているわけはないのですが)。

どうして弥勒とかみたいに領域を共有するものがたくさんあるのだろうと思った。
仏の世界は固定化されたものではなく、もっと流動的なものです。一種の下剋上が起こったり、逆に人気がなくなって姿を消す仏もいます。これは仏教だけではなく、神話やパンテオンがあるところでは、広くみられる現象です。このような変化や本来の出自を知ることで、その仏の性格やイメージを知ることができるというのが、教科書を執筆したときの立場でした。それは今でも有効だと思ってます。

胎蔵界マンダラの中でも、今回のパンテオン様式図を見ても、仏と神の位置関係に疑問があります。仏＞菩薩など＞神（異教含む）とありますが、密教でもご存じのように神も拝みます。他教では絶対的存在とある神が仏（密教）では相対的に位置づけられています。仏教（密教）における神格は、仏に対してどのような立場を認められているのでしょうか。
（森註・この質問はやや専門的なので、関心がない人はとばして下さい）
不等号（＞）は位階の上下を表すと理解しますが、ヒンドゥー教を起源とする神々が、密教のパンテオンに包摂されると、ほぼ例外なく「護法尊」的な位置づけになります。十二天がその代表的なものです。これは胎蔵界マンダラなどの「外金剛部」や、護摩の次第における「世間段」の扱いでも同様です。ただし、インドと日本の密教は分けて考えた方がいいかもしれません。日本では狩場明神や丹生明神のような日本古来の神々に対する信仰も、密教の中にみられるからです。インドについてみれば、外金剛部などに含まれるヒンドゥー神は、いずれも少し格下の神であるようです。インドラやアグニはかつては至高神的な存在でしたが、この時代には東や南東を守る護方神でしかありません。一方、シヴァやヴィシュヌのような、中世のヒンドゥー教でもっとも位が高い神は、密教には簡単には包摂されません。そのために『金剛頂経』の「降三世品」のような経典を、わざわざ創作しています。

仏たちの名称をみて、今までに読んだ本やマンガなどにも出てきていたのを思い出し、マンガといってもあなどれないと思った。また、仏とか菩薩とかはっきりと分かれているというわけでないようで、やはりむずかしいと思った。
私の知る範囲でも、マンガのタイトルや登場人物、モティーフなどに、ヒンドゥー教の神や仏教の仏が出るものがかなりあります。またテレビゲームにも、インド関係の神々の名前がよく登場するようです。理由はいろいろ考えられますが、ギリシャ神話や日本神話の神々のようによく知られていないので、手垢の付いた感じがしない、グロテスクなイメージがインドの神々から連想される、作者がインド関係の知識を断片的に持っている、などでしょうか。最近のマンガに「気」とか「神秘体験」をあつかった「精神世界」ものが多いことも関係するようです。

授業と直接関係ない気はしますが、観音菩薩の「観音」は「～観音」のそれとは違う意味なのですか。また、日本では地蔵菩薩は踏切の近くなどにいて、小さい頃から身近な守り神的存在のような気がしていたのですが、本来どんな意味を持つのですか。
関係あります。観音はインドでも中国でも日本でも、またチベットなどでもとても人気の高い菩薩です。そのため、単なる観音以外にもさまざまな

種類の観音が現れ、これらをまとめて「変化観音」といいます。馬頭観音や千手観音などの「～観音」がこのような変化観音です。これは、観音の霊験をとく『観音経』という経典（『法華経』の「普門品」）の中に、われわれが困ったときに、観音はそれぞれにふさわしい姿で現れることが説かれていることも影響しています。地蔵はインドでは独立した信仰はほとんどなかったようです。中国を経て日本に伝わる過程で、輪廻に苦しむわれわれを救済するもの、とくに子どもを救う神として信仰されるようになりました。また、踏切に限らず、四つ辻に地蔵がよくおかれるのは、このような場所が宗教的に重要であるからです。日本では地蔵は道祖神や庚申信仰とも混淆します。

なぜ「両義的なもの」は宗教によく取り上げられるのですか。あと、似ている、似ていないについて、今日の説明では根本的なところがわからなかった気がします。これから分かっていくんでしょうか。

なぜでしょうね。「両義的」であるからというのでは答えになりませんが、人間とはこのような特定のカテゴリーに収まらないものが気になったり、不気味に思うのではないでしょうか。似ている、似ていないについては、よけいなことを話しすぎたかもしれませんが、偶然似ているものがあっても、それは人類が普遍的に持っているイメージであることとか、歴史的な必然性がある場合、それは中国を媒介とした情報の伝達があったこと、作品のイメージを規定する文献があったことなどが、具体的な理由としてあげられます。「これから分かっていく」かどうかは分かりませんが、実際のスライドをみて、いろいろ考えてみて下さい。授業でも言ったように、それよりもむずかしい「なぜ似ていないのか」という問題もあわせて。

6. 画一化するイメージ

記号、シンボル、イメージはよく知らない、わからない者にしか付けられないという話が逆説的？でおもしろいと思いました。でもたしかに、よく知っている人にはそういうものは付けられないです。シンボルばかりが前に出てきたということは、それぞれの仏の本質を人々が重視しなくなってきたということですか。

たしかに逆説的です。でも、みなさんにやってもらったように、日常生活でも同じようなことはよく経験します。観音や文殊が昔からの友人、人工的に作ったような仏たちが新しい知り合いに対応します。観音や文殊などはイメージが画一化されるまでに、時間がかかりますし、文殊で見たように、最後まで個性を維持しようとした作品もあります。イメージの画一化の理由や背景については、今回の授業やさらにマンダラを取り上げるところで考えてみたいと思いますが、必ずしもデメリットだけではありません。また、初期の仏教美術を以前取り上げましたが、そこで見られた「釈迦の象徴的表現」も、シンボルによる代替と見ることができます。聖なるイメージにおける形式化とも関連します。

矢田地蔵縁起みたいにカラフルなのがあって、なんか新鮮でした。いつも仏さんたちの白黒の姿ばかりなので、たまにはあんなのもよい。なんか力強い地獄絵だったから、吸い込まれそうでした。帝釈天がすごくかわいかったです。梵天もアヒルにのってかわいんだけど、なんか私には帝釈天の方が愛らしく見えました。仏像見ていると、象って何回か見たことありますが、アヒルって全然出てこないんで、なんか奇妙な感じがします。動物に乗ってるのってなんか意味はあるんですか。観音坐像って女性ですか。なんかすごく色っぽくて、魅力的だと感じました。

地獄絵は日本の絵巻物や仏画などでひとつのジャ

ンルを形成するほど、多くの作品があります。図書館の絵巻物関係の画集などでも、その代表的なものが見られます。授業でもお話ししたように、地獄絵というのは人間の「怖いもの見たさ」を直接刺激するので、根強い人気があります。また、これを描く画家にとっても、苦悶にあえぐ罪人や、それを責め苛む鬼たちなど、腕の見せどころでもあります。梵天と帝釈天は、今回の感想でも「かわいい」「すてき」など人気が集中していました。いずれも東寺の講堂に安置されている平安初期の傑作です（国宝）。同じ建物には、これも授業で紹介している降三世明王や不動明王などもあります。日本の密教美術のもっともすぐれた作品群であると同時に、空海がもたらした密教の世界に直接触れることのできる貴重な場所です。京都駅から歩いていけるところですので、機会があればぜひどうぞ。梵天や帝釈天が乗る動物については、授業の終わりの方で取り上げる予定です。観音は男の仏ですが、教科書にも書いたように、観音の女性化は歴史的な事実で、おそらく日本人のかなりは観音を女性と思っているでしょう。観音の代名詞である「慈悲」と結びつくのは女性のイメージなのです。

持物一覧で気づいたんですが、どくろを使うことに意味があるんでしょうか。おどろおどろしんですけど…。

持物一覧などの資料は、前回は時間がなかったので、今回紹介します。どくろを持物とする仏は日本にはほとんどいません。例外的に深沙（じんしゃ）大将という仏が、どくろをいくつかつなげて首飾りにしています（京博の「空海と高野山展」にも出ていました）。それはともかく、インドの後期の密教やチベットの仏教では、どくろを重要な持物やシンボルとする仏がたくさん登場するようになります。仏教的な解釈では「悟り」や「空」を表したりしますが、当然、「死」や「不浄」とも結びついています。しばしば、どくろを容器のように持ち、その中に血をあふれさせることさえあります。ヒンドゥー教でもカーリーと呼ばれる恐ろしい女神が、同じように血をどくろに入れ、さらにそれを飲んでいる姿で表されます。日本人には想像も付かない姿ですが、これもインドにおける「聖なるイメージ」なのです。

菩薩の個性を持ち物に限定したのは、中心の仏を際だたせるためなのでしょうか。東京での「空海と高野山展」の日程を教えて下さい。

中心の仏も同じようにイメージが画一化されていくので、そういうわけではないようです。また、このような画一化の問題は、以前取り上げた釈迦の八相図などでもあてはまります。それまでの時代の釈迦の生涯を描いた作品が、それらの場面をかなり忠実に描いているのに対して、密教の時代の八相図は、その場面を示し最小限の要素のみが釈迦のまわりに添えられているだけでした。しかも釈迦自身も、誕生の場面が子どもの姿をとる以外は、ほとんど変化のない姿をしています。これからの「空海と高野山展」の日程は次の通りです。休館日などはホームページなどで確認して下さい。

名古屋展：愛知県美術館　2003 年 10 月 10 日〜11 月 24 日

東京展：東京国立博物館　2004 年 4 月 6 日〜5 月 16 日

和歌山展：和歌山県立博物館　2004 年 10 月 9 日〜11 月 23 日

インドと日本とで同じ密教を信仰しているのに、仏たちの世界のグループの分け方が異なるのは、どうしてだろうか。海を越えて伝来したことに関係するのだろうか。

たしかに日本に伝わった密教の起源はインドにありますが、そのすべてが伝わったわけではありません。おおざっぱにいって、インドの密教の 3 分の 2 は日本には伝わっていません。また、日本に伝わるまでにさまざまな地域を経由したことも考えましたが、そのことも仏たちの世界を変容させた理由です。とくに中国の存在は大きいでしょう。密教を受容した日本そのものにも、すでに固有の宗教や文化が存在したことも重要です。神道や民間信仰との習合はその顕著な例です。

授業の最初にあったパンテオンの説明がとてもわかりやすかったです。なぜ菩薩が多いのかという疑問が明らかになりました。菩薩自身が悟りを開く前に、まず衆生を悟りに導いてほしいだなんて、なんだか勝手というか、わがままな気がしました。またまたはっきりしないことがあるのですが、パンテオンとは「神々の世界」という意味で、その中に仏や菩薩といった位置づけがあるということは、ここでは「神」と「仏」はどのような関係によるのですか。仏も神の中にあるのですか。

大乗仏教は別名「菩薩の宗教」とでも呼び得るほど、菩薩が重要な存在になります。これを突き詰めていくと「誰でも菩薩」という状況となります。これは、寛大な考え方のように思えますが、見方を変えれば、菩薩とならないものの存在を認めないということになります。これをエスカレートさせれば、明王の説明のように、有無をいわさず異教徒を改宗させることということです。宗教とは「諸刃の剣」のようなもので、それによって心の平安や生きる喜びを得ることもできるのですが、かくのごとく、身勝手で恐ろしいものにもなります（現代社会を見ればよくわかります）。しかし、人間とは宗教を必要とする存在であるのもたしかです。パンテオンにおける「神と仏」ついては、「パンテオン」という言葉の意味は「神の世界」なのですが、その場合の神は「テオン」に対応する訳語で、「超越的存在」でも「聖なるもの」でも「神仏」でも何でもいいのです。宗教学的にそのような存在を「神」とよぶのが簡単だから使っています。仏も菩薩もその他のものも含まれますが、仏教のパンテオンにはヒンドゥー教起源の「神」も含まれるので混乱を招くようです。

なぜ、仏を大量生産したのですか。ひとつの仏に対する深い信仰が多数の仏への分散された信仰より強いはずです。大切なのは「教え」だから、仏の数は意味を持たない気がするのです。（人工的な気がしてきて信仰心をそいでしまうと思う。）それは人の信仰対象が「教え」そのものからずれていったことを示しているのでしょうか。

仏の数の増加とイメージの画一化に対しては、みなさんの感想でも否定的な意見が多かったようです。その是非はともかく、このような変化は歴史的にたしかに起こったのですから、「なぜそうならざるを得なかったのか」という問題を考える必要があります（学問ですから）。当時の仏教徒も、自分たちの信仰をわざわざそぐために仏を新たに作ったり、イメージをそろえたりはしなかったはずです。その意味で「大切なのは＜教え＞だから」という指摘は、重要だと思います。「教え」というのは仏教では「法」（ダルマ）ですが、まさにこの法が絶対的な存在になった背景に、仏の世界の広がりがあります。今回取り上げる仏教の宇宙観や、それを前提とする「神変」が重要となるのも、この「法」があるからです。教科書の第 1 章と第 2 章のテーマも、これに関係しますので、もう一度読んでみて下さい。

同じ仏像（たとえば釈迦像）を見分けるときには、印契や身体的特徴（頭髪、装飾）等の方法がありますが、見ていると同じ印契でも別の菩薩だったり、釈迦像もさまざまな印、様式を持つものがあります。仏像判断の決め手となるものは、各仏像に必ずあるのでしょうか。それとも総合的判断によるものもあるのですか。

仏像などの持つ身体的特徴や持物などは「図像学的特徴」と呼ばれることもあります。仏教美術に限らず、西洋のキリスト教美術や寓意画などは、イメージを構成するさまざまな要素が意味を持ち、全体がシステムを構築しています。密教美術の場合は、授業でもお話ししているように、個々の尊格の持つ特徴がかなり固定化していて、判断が容易です（これもイメージの画一化がもたらしたものです）。経典や儀軌などの文献に、このような図像学的特徴に関する情報が含まれていることも、一般的です。これに対し、大乗仏教以前の仏教美術は、必ずしも一定の特徴をつねにそなえているわけではなく、図像学的特徴以外の情報、たとえば宗派、制作年代、制作依頼者、地域なども、その像が何であるかの判断材料になります（密教美術の場合ももちろんあてはまりますが）。まわりの仏像、眷属、脇侍なども考慮に入れる必要があ

ります。日本でもインドでも、密教関係の仏像はおおむね尊名比定（どの仏像であるか）が容易ですが、それ以前のものは研究者によっても意見が分かれることがしばしばあります。それだからこそ、研究する楽しみもあるのです。

菩薩の正式名称の菩提薩埵ということばは初耳でした。以前出てきた金剛薩埵にもある薩埵とは、本来何を表すことばなのですか。菩提樹ということばもサンスクリット語から作ったのでしょうか。そもそも菩提樹って実在する植物なのですか。少なくとも角間の山にはなさそうですが。

薩埵はサンスクリットで sattva で、「ある」「存在する」を意味する動詞√as（英語の be 動詞のようなもの）現在分詞 sat に、抽象名詞を作る接尾辞 tva を加えてできています。「存在するもの」「存在すること」という意味になりますが、仏教では一般に「衆生」（しゅじょう）つまり生きているものを指すことばとしてよく用いられます。菩提薩埵の前半の菩提は「悟り」を意味し、全体で「悟りを求めるもの」というニュアンスのようですが、そのほかにもさまざまな解釈があります。金剛薩埵の薩埵も同じことばで、こちらは「菩提」を密教の重要な用語である「金剛」に置き換えて、人工的に作った名称です。菩提樹はサンスクリットでも bodhivṛkṣa という名称があり、そのまま「菩提の木」という意味です。シューベルトの歌曲で有名な「菩提樹」も同じ種類の樹木なのですが、ヨーロッパとインドでは少し違うそうで、植物学の方ではインドの方を「インド菩提樹」と読んで区別するそうです。本家が名称をとられてしまったようなものです。角間にあるかどうかはわかりません。

交通安全のお守りに「不動尊」って書かれたお守りをよく見るんですけど、不動と交通安全とどう関係あるんでしょうか。

不動を祀る寺院は真言宗つまり日本の密教系の宗派の寺院であることがほとんどですが、このような寺院では人々を災厄から守るさまざまな儀式が行われます。これらは「加持祈禱」（かじきとう）と呼ばれ、古くは平安貴族や皇族のためにもっぱら行われていました。無病息災、病気治癒などはこのような加持祈禱のもっとも一般的な願文で、現在であれば交通安全もその中に含まれます。東京の方では成田山のお守りなどがよく出回っていますが、成田山は新勝寺というお寺で、真言宗智山派に属します。金沢とその周辺では市内の伏見寺、富山との県境に近い倶利伽羅寺、加賀温泉の那谷寺などが真言宗の名刹です。

7. 仏塔と仏教世界観

自分がどこからどこまでかという質問にたいへん困った。身体は必ず自分であると思うが、自分がかもし出す雰囲気とかも自分という中に含んでしまってもいいと思うからだ。他の人はどのように考えているのだろうと思った。

先回の授業の後半は、「自分とは何か」という問題でかなり時間をとってしまいましたが、まだまだ言い足りなかったことがたくさんあります。それでも、あたりまえのように思っている自分という存在やその範囲について、いろいろ考えてもらえたと思います。たしかに、自分の境界を自分の身体に限定する必要はなく、その周囲も含むことも十分理解できます。「気」ということばが最近よく用いられますが、これも同じようなことでしょう。他の人がどのように考えているのかという問題は、認識論や心理学の対象になりますし、最近では認知科学という分野ができています。脳やことばの問題とも関係します。そもそも「人文科学」というのは人間についての学問なので、つきつめていけば「自分」を探求することになると言

ってもいいでしょう。

梵我一如が本質的な面で「仏＝神＝宇宙＝自己」であるならば、仏像やマンダラといったものは、自己を映す鏡のようなもの（もしくは理想像）なのだろうか。

そのとおりです。仏像やマンダラの授業で、自己とか宇宙とかを出してきたのは、単にそれらが観賞用の美術作品ではなく、宗教的な「イメージ」であるからです。マンダラについては来週以降に取り上げますが、簡単に言えば「仏の世界図」です。ただし、その世界を表す方法にも、インドの文化的、宗教的な枠組みがあります。ちょうど、われわれがことばを使うときに、特定の文法を用いるようなものです。授業ではこのような「枠組み」について紹介します。その場合、これまでの仏像のイメージやコスモロジーについての知識が役に立ちます。

マンダラに仏が千体も並んでるなんて、びっくりです。あんまり技術のない時にできたのに、ちょうど千体も規則正しく並んでるって、すごいです。いろいろ計算とかもいるだろうし。「まとめ」見てて、本当に画一化されてるっていうの思いました。毎週、いろんな仏像とか見てるけど、ポーズとか構成とかが似ているのが本当に多いと思います。全然関係のない仏像同士が似てたりしたら、どんどん仏像の良さがなくなりそう。でも今から新しい仏像の姿を見ても、逆に奇妙かも…。でももっと個性いっぱいになってほしいです。

たしかに個性的な仏がたくさんある方が、見る方にとっては楽しいでしょうね。それはともかく、マンダラに描かれた千体の仏は「賢劫千仏」といいますが、授業でお見せしている作品は「西院本両界曼荼羅」という作品で、平安中期のマンダラの傑作です。賢劫千仏が描かれているのはマンダラ全体から見れば周辺なのですが、このようなところでもまったく手を抜かず、ていねいに描いています。日本にはかなりの数の金剛界マンダラが現存しますが、その中にはもっと雑に描かれたものもたくさんあります。ところで、仏像に限らず、古い時代の美術品や建造物を見るとその水準の高さに驚かされることがしばしばあります。しかし、それは「現代は科学技術が発達した時代だ」という先入観によるものです。たとえば、いわゆる四大文明が起こったところでは、いずれも巨大な建造物や都市が出現していますが、その背景には高度な技術があったはずです。おそらく人間というのは数千年ではそれほど発達するものではないのでしょう。芸術作品の場合、それはもっと顕著です。現在の仏師がどんなにレベルの高い作品を作っても、たとえば運慶や快慶の作品のレベルに達するのはほとんど不可能です。学問や教育の水準と、技術の水準は必ずしも一致しないのです。

絵を描いたとき思ったんですけど、この話は本当にあったのかと思うくらいうそくさいのですが、作り話なんですか。

先週の課題については、授業時間内に取り上げることができなくて、今週に持ち越しになりました。読んでもらったテキストは、日本にも伝わり重視された『法華経』の冒頭部分です。説法を始める釈迦が、その準備段階として「神変」という宇宙全体を舞台にした奇跡を見せます。大乗仏教の経典の多くは、このような「神変」を経典の最初に説きます。法華経のものはまだそれほど複雑ではありません。これが本当の話か作り話かという質問は、聖書の天地創造やノアの方舟が歴史的な事実であるかどうかというのと同じ質問です。そうであると信じる人にとっては、本当の話であって、信じない人には作り話になるでしょう。しかし、このような二者択一を示すと、ほとんどの人は「じゃあ作り話だ」と思うでしょうが、われわれが「事実である」と考えることだって、立場や見方を変えればいくらでも「作り話」になります（具体的な例は省略します）。私を含め、このようなものを文化としてとらえる研究者は、物語の真偽よりも、それを作り出した人間そのものに関心があります。一方、神学のように、特定の宗教の基本的な教理をベースに（つまり、このような話も真実であるという立場で）、学問の体系を構築している分野もあります。

なぜ眉間の毛の渦から光が放たれたのですか。
他の大乗経典では、眉間以外にも頭頂にある肉髻や、口の中の舌、体中の毛穴などが、神変のときにいろいろな働きをします。これらは前にも取り上げたように、釈迦のような仏と転輪王にのみ備わっている超人的な身体的な特徴、すなわち三十二相に含まれます。これらが神変を起こすためのポイントのような役割を果たしているのです。眉間がしばしば現れるのは、おそらく眉間というのが一種のエネルギーの源として理解されることが多かったのでしょう。何となく感覚としてわかるような気がしますが…。

昔の人々は宇宙を神聖で秩序あるものとして考えていたことが興味深い。世の中が秩序のないことに不満があったのではないだろうか。
宇宙を表す「コスモス」ということばは、そのまま「秩序」を意味します。われわれが自分を取り巻く世界を何らかのまとまりとしてとらえるということは、すでにその中に「秩序」を見いだしていることになります。逆に、混沌とした世界は「コスモス」とは呼べないのです。実際、天体の運行や生物の発生、消滅などを見ていると、どうしてこれだけきちんとしているのか驚きます（生物や地学の授業でそういう感動を覚えませんでしたか？）。宇宙観が特定の社会的な状況を反映することもなくはないですが、もっと長い時間的なスパンで現れるもののようです。むしろ、インド的な世界観や中国的な世界観というように、特定の民族や文化と結ぶつくことの方が多いようです。しかも、そのような類型を越えて、人類が共通にもつ宇宙論というものもあり、不思議です。ついでにいえば、日本ではこのような宇宙論はほとんど発達しませんでした。これは授業で取り上げたような「自己」や「世界」についての考察を、ほとんど行ってこなかった民族性かもしれません。

梵我一如の説明がよくわからなかった。その中の自己の考え方がわからない。網みたいなものとはどういうことですか。
わかっているつもりで説明を進めていたようです。梵我一如についてはともかく、われわれの身体がかならずしも自己と重なるのではないということを、補足しておきます。ふつう、われわれが自己と思っている身体は、閉ざされているような気がします。皮膚や体毛などによって外界と遮断されているからです。しかし、食物を摂取して、それを排泄して生きているわれわれは、つねに体内に「異物」、つまり自分自身ではないものを取り込んでいます（透明人間の話はこのことで、食べ物は消化されるまでは透明ではないのではないのか、あるいは排泄する前の状態はどうかということです）。消化器官というのは、形は複雑ですが、簡単にすれば、体を貫く管のようなものととらえられます。そうすると、この管を包み込むわれわれの体も、筒のようなイメージでとらえることができます。しかし、食べ物の動きはこの管を通過するだけかもしれませんが、そこから摂取された栄養などは、消化器官から吸収されてからだの隅々まで行き渡ります。呼吸によって得られる酸素も同じように全身に行き渡り、二酸化炭素も逆の道をたどります。呼吸は口や鼻だけではなく、皮膚呼吸もありますので、全身でこのような物質の移動が起こっています。これらを総体的に見れば、われわれの身体は、つねに外界と物質の移動を行っている「穴だらけの膜」のようなもので、それをたとえて「網」と言ったのです。生物の知識としては当たり前のことですが、「私とは何か」という問題としてとらえれば、意外な驚きがあるのではないでしょうか。

自分の中で神というと悟りきった神の他に荒ぶる神というイメージが強いので、忿怒尊は何となく神々しく感じます。今まで見てきた仏は無表情か怒っているかのどちらかですが、笑っていたり泣いていたりする仏はいないのでしょうか。
授業でよくつかう「聖なるイメージ」というのは、じつは質問にあるような二面性を持っています。完全や秩序などと通じる「整った」イメージと、グロテスクとか奇異というイメージです。前者は常識的な神や仏のイメージですが、じつは世界の宗教には後者のようなイメージを「聖なるイメー

ジ」として重視するものがたくさんあります。ドイツの宗教学者 R. オットーは、このようなものを「ヌミノーゼ」と呼びました（『聖なるもの』岩波文庫）。怒りというのは仏教から見れば悟りを妨げる煩悩のひとつなので、仏のイメージとしては本来無縁のものです。泣いたり笑ったりする感情も同様です。しかし、ヒンドゥー教などの他の宗教と同様に、ヌミノーゼ的なイメージが必要になったとき、登場してきたのが忿怒尊（日本では明王）のような仏たちなのです。

東大寺大仏蓮弁の線刻にはおどろきました。ひとつひとつにこんな細工がしてあるとは知らなかったので、是非一度実際に見てみたいです。シンメトリーは西洋の建物に多いというイメージがあったのですが、完全さを聖なるものとして求めるのは、どの世界にかかわらず、人類に共通の感覚なのだと思いました。なぜ須弥山世界は、半月と円なのですか？円の方が聖なるイメージに合うと思います。

東大寺の蓮弁は、一般の拝観者は昇れない少し高いところにあります。特別の許可があれば見ることができますが、むずかしいようです。何といっても奈良時代のオリジナルで国宝ですから。そのかわり、精巧なレプリカが大仏殿の中に置いてあります。こちらでもよくわかりますから、機会があれば見てきて下さい。シンメトリーは聖なる世界のイメージの基本で、来週からくわしくみるマンダラでも顕著です。インドの仏教寺院なども、きれいなシンメトリーです。須弥山世界にある半月というのは、たしかに不釣り合いのような気がしますが、それ以外は基本的には円と正方形で構成されています。宇宙全体はおそらく球体としてイメージされていたのでしょう。われわれも無意識のうちに、宇宙を球のような形でとらえているのではないでしょうか。

自分が自分であると認識するのは、脳というよりも顔の方が視覚的だし、特徴があるのではないかと考えた。

そういうとらえ方もあるでしょう。顔こそが自分というイメージをもっとも特徴的に表しているということでしょうね。それはともかく、その一方でわれわれは自分の顔を直接視覚的にとらえることができないということもあります。自分の目では自分の顔を直接見ることができないのですから。鏡に映った顔があるではないかと思うかもしれませんが、これは鏡像なので、左右が反転しています。それに、立体的なはずなのに平面の像でしかありません。平面化されているのは写真や映像でも同様です。これは視覚に限らず、自分自身によってとらえられる自己と、他者がとらえる自己とは、永遠に一致しないことも表しています。

「自」と「他」の話は面白かったです。自分の身体をとても不確かなものに感じた、というといいすぎですが、すごく不思議な気分になりました。なぜ古代の人々は「全体」ということ、あるいは「自己と全体」ということを考えたのでしょうか。まわりを見渡しても自分と近くの人々や景色しか見えないのに、なぜそこまで考えが及んだのですか。

「自」と「他」のような話は哲学などの根本問題ですが、これまでの学校教育ではほとんど取り上げられることがなかったのではないでしょうか。あたりまえのようなことでも、見方を変えてみると、まったく様相を示します。「自分」をテーマにした文献は、哲学の分野では数多くありますが（最近はやりの「自分探し」のような本のことではありません）、最近のものを少しあげておきます。関心があればいろいろ読んでみて下さい。

鎮目恭夫　1999　『人間にとって自分とは何か』みすず書房。

村田純一　1998　『新・哲学講義　4　「わたし」とは誰か』岩波書店。

人間が「全体」や「世界」を考えるのはなぜでしょうね。やはり、その根っこには「自分とは何か」という問題があるような気がします。人間に思考力や想像力がある限り、必ず直面する問題ではないでしょうか。

世界が広すぎます。なぜこのような差を付ける必

要があったのでしょうか。仏がどれほど偉大かを示すだけなら、天国を遠いところにひとつだけ作ればいいのではないでしょうか。
前回紹介した宇宙観は、まだ「小世界」といわれる段階で、序の口です。本当は、その先の爆発的に膨張するところまでやりたかったのですが、時間がありませんでした。仏の偉大さを示したかったという理由は、おそらく正しいのですが、そのためにそこにいたるまでの世界がいかに広大であるかを示す必要もあったのです。

天国というのはもともと仏教要語だと知り、おどろきました。別の授業でゼウスのことを最初、宣教師たちは「大日」と訳したけど、それが仏教用語だと知り、そのままゼウスと呼ぶことにしたということを聞きましたが、当時から日本語の中で仏教用語だと気づかないくらい、仏教というのは日本人の生活の中に密着していたものなんですね。
誤解を与えたようですが、天国という用語そのものは仏教では一般的ではありません。天とか天上世界といった場合、われわれはキリスト教的な天国を連想しますが、仏教用語としては神（とくにヒンドゥー教起源の神でサンスクリットで deva）を指すことばで、彼らが住む世界がそのまま天と呼ばれるということです。大日とゼウスの話は、たしか遠藤周作の小説で取り上げられていて、有名なようです。それよりも古い事例では、中国の唐代にネストリウス派キリスト教が景教として伝わったとき、密教の用語をもっぱら用いたといいます。日本にキリスト教が伝わったときは、かわった仏教の一派ぐらいとして受け入れられたようです。

8. 再生する世界

仏の世界のスケールの広さが予想以上のものでおどろきました。無限に大きくなるだけではなく、ハスの花の種の中にも無数の世界が広がっているという限りなく小さな世界にも目を向けていたインド人の世界観には感じさせられます。説明を聞いているうちに、仏の世界は数の単位のような印象を受けました。本で 10 の 52 乗は恒河沙で、10 の 56 乗は阿僧祇というふうに続いているのを読んだことがありますが、これらは仏教用語ですよね。
仏教の世界観を 2 回にわたって取り上げましたが、「むずかしかった」「圧倒された」「想像もできない」などの感想が多かったようです。たしかにわれわれの感覚では理解できないようなスケールと原理を持っていますが、細かいことはさておき、インドの仏教徒が「世界」というものを構造的にとらえていること、その構造は中心を持ち階層的であること、上に行くほど規模が大きくなること（それも爆発的に）、空間と時間が密接な関係を持っていることなどのポイントを押さえてもらえればと思います。このような世界はいかに広大であっても、あくまでも「迷いの世界」であって、仏の「悟りの世界」ではないのですが、仏がわれわれの前に姿を表し、法を説くことによって救済する舞台が、このような世界なのです。現実離れした話のように思うかもしれませんが、仏の偉大さを表すためにも、このような広大無辺な世界が必要なのです。数の単位はそのとおりで、千、万、億、兆などと続いていくと、恒河沙（ごうがしゃ）も阿僧祇（あそうぎ）も出てきます。単位として一番大きいのは「無量大数」で、その前は「不可思議」です。ちなみに恒河沙はガンジス川の砂の数という意味です。大乗仏教の経典にはこのような無限大に近い数が、よく現れます。宇宙にいる仏の数や、その仏が活動する「小宇宙」（仏国土）の数をしばしば表します。

ストゥーパは水に浮いている半球状のものというイメージなら、亀ではないでしょうか。インドでは世界を亀と蛇で表すって話を聞いたことがある

ようなないような。もしくは坊主のハゲ頭ですか。
ストゥーパが何に見えるかという質問には、正解があるわけではありません。次の説明との関連では、卵というイメージを持ってもらえると、こちらとしては都合がいいというぐらいです。たしかに亀はインドの世界観で重要な役割を果たします。とくに、ヒンドゥー教の神話で「乳海攪拌」という創世神話があり、そこではヴィシュヌが亀となって活躍します。蛇も現れます。坊主のハゲ頭という答えも、なかなかユニークでいいのですが…。

なぜ仏塔はそのままの形式で日本へは伝わってこなかったのでしょうか。
日本の五重塔などの形式はインドまではさかのぼれません。中国の塔形式の建築の影響を受けたものです。このほか、多宝塔という形式の塔も日本の密教寺院にありますが、これは少しインドのストゥーパに似ているところがあります。ただ、いずれの塔ももっとも高いところに、尖塔状の飾りが付いていますが、これはインドの仏塔にも共通します。今回のスライドで確認して下さい。

水というエレメントは考えてみると奥が深い。生命の根源でもある水を仏教の世界観で見ると、さらなる広がりを見せると感じた。
水ほどわれわれの身近にあって重要な物質は他にはないでしょう。空気ももちろん重要ですが、手に取ったり、加工することは、普通ではできません。水が生命の源であることも、常識的に知っているでしょうが、古代インドでは、それを具体的なもの（たとえばハスや水瓶などのシンボル）によって表しました。仏塔のまわりにあふれているのはこのようなシンボルです。宇宙そのものをひとつの生命体としてとらえた場合にも、この水が重要な役割を果たすことを、仏塔を中心に今回取り上げます。

仏教の空間や時間はあまりにも無限で気が遠くなりそうです。インドで日々の生活に追われていた庶民のあいだで、仏教がすたれていったのも少しわかる気がします。どうでもいいことなんですけど、マカラはいつでも尻尾を巻いているんですか。
仏教に限らず、宗教がどれだけ複雑で高尚な哲学や思想を作り出しても、それが一般の人々にとって何の意味もないということはよくあります。キリスト教の神学にしても、普通の信者にはどうでもいいことですし、日本でもお寺や法事で聞く説教に、むずかしい話が出ればいやがられます。一般の人々にとって、宗教とは心の支えや癒し、あるいは生活の指針になればそれでいいのです。しかし、宗教がこのような思弁や論理を発達させたことが、近代的な科学の誕生にもつながりました（それがいいか悪いかは別にして）。宗教学という分野でも、哲学思想を扱う研究者もいれば、民衆のあいだでどのような役割を果たしているかに関心がある人もいます。マカラの尻尾は、これまであまり気にしていませんでした。蛇やナーガの表現でも同様かもしれません。他の作例でもチェックしてみて下さい。

ハスの記事を読んで疑問に思ったんですが、「他の生き物を補食する」ものが極楽にいることはおかしいということは、極楽にいる人（？）は何も食べないんですか。
何も食べないんです。食べるというのは食欲という煩悩のなせるわざです。何といっても、極楽は仏の世界なのですから、煩悩があっては困るのです。極楽の情景は『阿弥陀経』のような浄土系の経典に、こと細かく描写されています。当時の人々が理想としていた世界、つまりユートピアなのでしょう。実際に読んでみることをおすすめしますが、楽しいこととか素敵な場所ということについての人間の想像力というのは、いじましいほど貧困です。木が宝石でできていて、風が吹くと心地よい音がするといった程度です。よく言われることですが、極楽浄土なんて三日も住めば飽きてしまうでしょう。それに対して、反対の地獄の世界は、多種多様の苦しみが課せられる世界ですから、人間の持つ本性のようなものがよく現れています。「苦しみ」というより、どのように苦しめるかという視点なのでしょう。このような地獄の光景は、画家の創作意欲もかきたて、多くの地

獄絵を生み出しました。

口から花綱を出すヤクシャを見て、いつも思うのですが、この作品のストーリーはどのようなものなのですか。また、ヤクシャは何人もいるものなのですか。

ヤクシャとはある種の神的存在を指す普通名詞で、特定のものではありません。漢訳では「夜叉」と訳されます。仏塔の装飾にはさまざまなヤクシャが現れますが、ほとんどは装飾モチーフであって、特定のストーリーとは結びついていません。花綱というのは植物を編んで作った綱で、豊穣多産のシンボルです。インドのみならず、ギリシャやローマなどのオリエント世界でも、装飾モチーフとして好まれました。ガンダーラにもたくさんあります。口からこれを吐き出すというのは、なかなかすさまじいイメージですが、やはりこれも植物の繁茂力を背景にした豊饒のイメージなのでしょう。日本の古事記にあるオホゲツヒメの神話も、これと同じように理解できます。オホゲツヒメというのは自らの口から食べ物を吐き出して、これによってスサノオを歓待した女神です。食べた後でそのことを知ったスサノオによって、殺されるのですが、その死体からはさまざまな植物が発生します。穀物や芋類などの食用になる植物の起源となります。このようなタイプの女神にまつわる神話は、東南アジアを中心に幅広く分布し、神話学で「ハイヌヴェレ型神話」と呼ばれています。

宇宙があまりにも大きいのは、人間がごく卑小な存在であるということを明示するためだろうか。また、数も無数にあるが、それは人間の自我が統一されたものだと考えられていたせいではないだろうか。（本当は無数の我の束になったものが「自」だと思う）。

たしかに、仏の世界の広大さと、それをすべてコントロールするような、究極的な仏（法身といったりします）の存在を説くことは、われわれ人間の卑小さを表すという目的もあったでしょうが、単に巨大なものと卑小なものという対比ではなく、その両者がじつは本質的には異ならないことも意識されていたと思います。後半の質問は、私の理解で正しいかわかりませんが、ウパニシャッド哲学の「アートマン」のようなとらえ方でしょうか。ただし、そこではアートマンはそれがそのまま絶対的な宇宙原理であるブラフマンと同一であると考えられ、無数のアートマンを集合させるという見方ではないようです。

大仏がそんなに大きいということは、私たちが空を見上げれば、仏の身体の細胞のひとつひとつを見ていることになったりするのかなと思いました。そうするとまた「大」と「小」がごっちゃになってくる気がします。でもそれが自己と宇宙ということなのでしょうか。何かめちゃくちゃですね。すみません。なぜ仏教は輪廻とか「反復する時間」とか繰り返す概念が主なのですか。キリスト教では「終末」を定めていますよね。まったく反対であるのが不思議です。

宇宙が仏であるという考え方は、宇宙全体を（つまりわれわれを含む全存在を）「聖なるもの」としてとらえることで、これは今回の授業でも取り上げます。その場合、実際の宇宙の構造と、仏の身体の構造との対応はあまり問題になりません。解剖学的な知識とは無縁だったようです。しかしその一方で、仏の身体についての関心はさまざまなところで現れ、『華厳経』では仏の身体の毛穴ひとつひとつに無数の世界がおさめられ、それらがたがいに光によって照らしあっているという描写も出てきます。その世界にはやはり法を説く仏がいるのですから、その仏の毛穴にも…ということになり、もう何がなんだかわからないですね。この場合の毛穴は、以前取り上げた「仏の三十二相」に含まれます（同じ向きで生えている）。『法華経』で光を発する眉間の白毫もそのひとつでした。仏の身体が問題となるのは、生物学的な身体ではなく、三十二相をそなえたシンボリックな身体なのでしょう。時間についてはそのとおりで、インドばかりでなく中国や日本も「反復する時間」や「円環的な時間」が普通ですが、キリスト教では天地創造にはじまり最後の審判で終わる「直線的な時間」が説かれます。これはユダヤ教

やイスラム教でも同様です。1 年という周期を基本とする農耕民族と、砂漠を生活の場とする遊牧民との違いからくるという説もあります。

古代中国の名作「長恨歌」では、楊貴妃が死後、仙女のひとりに生まれ変わっていましたが、仏の世界で生まれ変わった人間が、仏のような存在になることができるのでしょうか。

仏の世界は悟りの世界ですから、そこに入ったものは二度と生まれ変わりません。輪廻再生はわれわれ衆生の迷いの世界です。たしかに中国には「神仙の世界」というのがあり、インドの天がこれに似ていますが、同じものではありませんし、直接の影響関係は稀薄でしょう。ただし、造型作品としては、インドでも中国でも「飛天」というものがあり、イメージの上でもつながりがあるようです。

ハスの花の中に世界は 20 層ぐらい重なっていると聞いたが、下から見たら上の世界の様子は見えるのだろうか。また、見えないのだとしたら、何が見えるのだろうか。世界の端はあると考えられていたのだろうか。

普通は見えません。しかし、仏が法を説くときに示す神変で、すべての世界が照らし出されて、そこでも、別の仏が法を説いている光景が見えると、大乗経典には記されています。このような情景は「相互照見」と呼ばれ、大乗仏教の重要な概念となります。前々回に配布した資料の中に、関連するものがありますから読んでおいて下さい（梶山『神変』）。世界は全体としてとらえるという点では、世界の端はあると考えられていたでしょうが、実際にここが端であるというような説明ではありません。

インドの仏教徒は、ハスの中のほんの一部を人間の世界として与えている。もし、欧米の人々にこれと同じ質問をしたら、華の真ん中に大きく、人間のスペースをとりそう。いろんな国の人に、ハスの花に宇宙観を示してもらったら面白いと思った。種子の中は小さなスペースだけれど、種子は生命を生む大事な場所。インドの仏教徒は自分たちの住む場所を謙遜しながらも大切に考えていたのではないかな。

種子が生命を生む場所というのは、今回の授業でも取り上げる重要なポイントです。卵も種子も同じですが、そこからすべてが生まれてくることが、驚異ともいえるのです。これは 2 千年前のインド人でも、われわれ日本人でも共有できる驚きでしょう。小さいものに全体が含まれるとか、小さいものが大きいものと一致するというのは、常識的には間違っているとか、理解不可能と思われますが、たとえば、数学では「部分は全体に一致する」と言われますし、生物学でも「個体発生は系統発生を再現する」と言われたりして、じつは人間の思考法としては自然なものです。

書名は忘れましたが、最近よく『法華経』を聞くので、本を少し読んで勉強しました。釈迦が最後に説いた教えであると知り、おどろきました。また、聖徳太子が取り入れた三経のひとつであったこと等も知りました。最後の絵が浄土図につながっていくとのことですが、浄土宗とかで描かれるものにたしかに似たものを感じたのは気のせいでしょうか。マンダラにも似ていると思いました。

ぜひ、いろいろ本を読んで勉強して下さい。『法華経』に限らず、仏教についての解説書はたくさんありますが、テーマが宗教であるだけに、いい加減なものもたくさんあります。初心者向けには、定評のある新書などが適当でしょう。岩波、講談社、中公の新書なら、おおむね信頼できる内容だと思います。『法華経』というのは日本の仏教に大きな影響を与えた経典ですが、とくに戦前から戦後にかけて現れた新興宗教の多くが、この経典をもっとも重視します。そのような立場からの本も多いのですが、学問的には問題があるものが大半です（信仰のレベルと学問のレベルは同じではありません）。神変を表した作品が浄土図へと受け継がれているのは、インドから中国、日本へという仏教美術の流れを考える上で、きわめて重要です。マンダラはもともと浄土図的な「仏の世界図」とは異なる原理で描かれていたのですが、日

本では「当麻曼荼羅」のような、浄土図としてのマンダラが現れます。平安時代の後期には浄土教と密教が相互に影響を与えあいます。マンダラについては今回から少しずつ見ていきたいと思いますが、これまでの授業ともつながっていく内容です。

9. マンダラとは何か

マンダラを見ると、子どもの綱引きの絵にたしかに似ていた。マンダラと子どもの絵の共通点は、多くのものを表現するために工夫した結果生じたものだとわかった。話は変わりますが、中国のマンダラを見たことがありませんが、実際に存在するのですか。

マンダラと子どもの絵との関係は、今回あらためて説明します。前回はとりあえず、われわれが描く絵というものが、これまでの教育などによって、いかに画一化されているかを感じてもらいました。別に子どもの絵ではなくても、アフリカの未開民族の絵とか、あるいはピカソなどのキュビズムの絵でも同じようなことが言えます（ピカソやキュビズムについては指摘してくれた方もいます）。中国のマンダラはほとんど現存しません。チベットの系のマンダラは北京や承徳などに、明代や清代のものがありますが、唐代の中国密教のものはきわめて少数です。その数少ない例が、平安時代に日本にもたらされています。高野山の「板彫曼荼羅」がそれです。マンダラに含まれる仏たちを描いた白描図も伝わっています。また、西安市の近くにある法門寺という寺院からは、マンダラをベースにした工芸品が最近発掘され、研究者の間で注目されています。9 世紀末の密教図像が大量に発見されたからです。

今日は生命の誕生、概念の世界などと、いろいろなテーマにふれてたいへん興味深かった。子どもの絵の描き方を例にとった、知的発達とともに変化する絵の描き方ということは考えさせられることが多く、私たちがものを描くというときに以下に多くの制約を自分で課しているのかと、はっとさせられた。マンダラのような平面的な絵は、発展途上の描き方というわけではないということもわかった。また、描き方についての制約を取り払って有名なのが、ピカソなのだろうと思った。

前回の授業はコスモロジーや仏塔の象徴性などと、マンダラ入門が詰め込まれたので、かなり盛りだくさんの内容になってしまいました。しかし、これらのテーマは実際には連続する部分も多くあります。マンダラの終わったところでまとめるつもりですが、どこが関連するか自分でも考えてみて下さい。さて、前のところにも書きましたが、ピカソをはじめキュビズムの画家が描いた絵は、対象を分解して、ふたたび接合しているという点で、マンダラの描き方とよく似ています。さらに、インドの仏教美術の流れを以前にたどったときに、異時同景図つまりひとつの画面に異なった時間帯の出来事が詰め込まれているという話をしましたが、マンダラに見られる複数の視点は、このような形式とも関係すると考えています。

子どもの絵の視点はかなり混沌としているような気がした。私たちはすでに固定観念に縛られているから、そう思ったんだと思う。無色界は表すことができないとおっしゃっていましたが、私たちには想像ができないので、イメージとしては混沌としているような感じに思えてしまうのですが、秩序だっているのでしょうか。

無色界は空間的な広がりがない世界なので、そもそも絵画のような平面に表すことができません。もちろん立体にもです。マンダラに表されているのは「仏の世界」なので、さらにそれよりもレベルは上の世界です。平面とか立体とか以前に、何らかの形で「再現」することさえも不可能なはずです。マンダラが「仏の世界」を表しているとい

うのは、表すことができないのですから、本来矛盾しているのです。そのため、伝統的な仏教学では、「真の曼荼羅」というものは形に表すことができないが、「仮のマンダラ」として、絵画化されたというような説明をします。これは巧みな説明ですが、なぜ、われわれが見るような形でマンダラは表されたかについては説明していません。授業でも言ったように「マンダラは悟りの世界である」という定義は、誰にもそれを確認できないという意味で、それ以上の説明を拒否しています。授業ではこれに対し「表すことができないものを、どのように表しているのか」、そして「なぜわざわざ表そうとしたのか」という疑問を考えてみます。そのヒントが「子どもの絵」と「儀礼」です。

マンダラという言葉自体は、高校の日本史でやったけれど、それが何であるかということは全然知らなかった。まだはっきりとはわからないけど、子どもの描く立方体の絵を見て少し納得した

マンダラはサンスクリット（梵語）ですから、外来語なのですが、われわれの日常生活の中でもときどき目にします。テレビの番組に「なんとかマンダラ」というのが以前にありましたし、週刊誌の見出しなどにも「世相マンダラ」とか「人間マンダラ」というような使われ方をしています。最近、駅前の県立音楽堂で行われる邦楽の演奏会に「マンダラ」を含むものがありました。これらはおおむね「複雑なものが詰め込まれている」という様なニュアンスで用いられているようです。たしかにマンダラから受ける印象にそのようなものがあるのは否めません。しかし、複雑なものというのが「混沌」であるとすると、実際のマンダラはそれとは逆の「秩序」（授業で取り上げてきた宇宙論的な意味での）を体現するものですから、むしろ逆になってしまいます。高校の日本史に登場するマンダラは、おそらく平安初期に空海らによってもたらされたもので、挿絵として実際の作品も紹介されていたかもしれません。授業でもお見せしますが、これだけ見てもそれが何かは絶対にわからないでしょう。言い換えれば、マンダラを理解するためには、これまでの授業で取り上げてきたインドの仏教美術、仏たちの世界、宇宙観、仏塔などの知識が必要なのです。

軸＝世界軸と先生が描いたんですけど、なぜ軸が必要なんでしょうか。それほど重要なんでしょうか。（世界をまとめるためのものとしてほしかったとか）

世界観やそのイメージは、こういうものを作ろうとして、アイディアを出し合ったできたものではなく、特定の民族や文化で共通するイメージが自然発生的に現れたと考えられます。その構造はさまざまですが、共通して「軸」のようなものが現れるということです。これは「世界は中心を持つ」ということもできます。同様に「なぜ中心があるのか」という質問も可能ですが、むしろ、中心を持たない世界というものを、人間が持つことがむずかしいと見るべきでしょう。世界地図を例にするといいかもしれません。日本で売っている世界地図は、当然、日本が中心で太平洋が画面の大半を占めています。しかし、欧米の地図では大西洋が真ん中あたりにあり、日本は全体の右端、つまり東の果てです（だから極東というのです）。「世界の中心には自分がいる」というのが、人間の持つ世界観の基本なのです。「私とは何か」を世界観の授業の中で取り上げたのはこのためです。軸という形態を持つのは、水平的な広がりを天と地、あるいはその中間の空という領域を、このような中心が貫くためです。

因中有果論の話がイメージできなくてわからなかった。もう一度説明してほしい。

時間的にむずかしいので、以前同じテーマで話して活字になっているものを資料として配付します。宿題とかではありませんが、一度読んでみて下さい。この数回の授業であつかった内容が、ところどころに出てきます。

金剛界曼荼羅は 9 つに分けられた部分はすべて同じ配置だと思っていたけど、違っていた。何となく中心の部屋に中心となる仏が 1 体描かれているイメージがあったけど、今日見た金剛界マンダラ

は、上の段の真ん中のところに大きな仏が描かれていたのも意外だった。金剛界マンダラ、胎蔵マンダラは名前を聞いたことはあるけど、何が違うのかまったくわからないので知りたいと思った。
日本の金剛界マンダラは 9 つの部部に分かれるので「九会曼荼羅」とも呼ばれます。このような形式のマンダラはインドやチベットにはありません。おそらく唐代の中国で成立したものです。9 つの部分はいずれも、このマンダラが典拠とする経典（『金剛頂経』といいます）に基づいていますが、右上の「理趣会」のみは『理趣経』によります。マンダラの種類と詳しい内容は、授業では時間的にあつかえません。金剛界と胎蔵については教科書のコラム③と④を参照して下さい。現在、学部の授業で「アジアのマンダラ」という内容で、いろいろな地域のさまざまなマンダラを解説しています。

仏を内包する日本の仏塔には、インドのように宇宙を内包するというイメージはあるのですか。仏塔は日本のものはイメージ的に規模が小さくなってしまったように思います。
おそらくないと思います。日本人が「宇宙」や「世界」に対しほとんど関心を向けなかったのは、授業でも強調しているとおりです。日本の密教寺院の塔は、マンダラと結びつくことで独特の展開をします。日本のマンダラは金剛界と胎蔵界の 2 種類が圧倒的に重要で、しかもこの 2 種が一組のものとして扱われます（金胎不二とか両部不二といいます）。仏塔の中に仏像を配置するときも、この理念にもとづくことがしばしばあります。これはインドでは考えられなかったことです。

私は京都出身なので、久々に五重塔を見てなんかうれしかったです。いろんな形の仏塔があるんだって、なんか感心しました。でも場所によって、仏塔の形も全然違った。日本にある仏塔は典型的な感じで、それにインドのやつとかも違いすぎて、仏塔って感じないです。半球形の仏塔は卵のイメージっていうのは、よくわかるんですけど、何がどのように伝わって日本の仏塔の形になったんですか。金剛界マンダラみたいにマンダラにも顔が四つあったりするんですね。マンダラってどれを見ても引き込まれそうに、何か魅力を感じます。
東寺の五重塔は国内最大の五重塔で、京都の中でもよく目立ちます。新幹線に乗っていると、車窓からも見ることができますね。仏塔の歴史については詳しいことは私もよくわかりません。五重塔のような多層塔は、中国で誕生したようですが、日本に伝わるときには朝鮮半島を経由することもあります。日本の仏塔についての文献を少しあげておきます。
濱島正士　1992　『寺社建築の鑑賞基礎知識』至文堂。
濱島正士　2001　『日本仏塔集成』中央公論美術出版。
ネパールやチベットの仏塔に目があるのは、新聞のコラムでも書いたように、仏塔全体を仏とみなしているからですが、たんに仏の姿をまねしているというだけではなく、密教では仏が宇宙として顕現し、仏塔がそれを象徴しているという背景があるからです。マンダラが求心的であるのはそのとおりで、中心に引き込まれるというのは、マンダラの持つ機能からも理由があります（今回取り上げます）。

名古屋の覚王山の「日泰寺」に、本物といわれる仏舎利をおさめた塔があるのですが、本当に本物なのでしょうか。
本物といわれています。しかし、仏舎利塔（つまり仏塔のことです）の下に埋められているので見ることも、取り出すこともできません。この舎利は第 2 次大戦後、タイから寄贈されたものです。仏教徒にとって舎利つまり釈迦の骨が貴重なものであるのはたしかですが、単に教祖の遺骨という以上に舎利は歴史的に重要です。仏塔の誕生も舎利の埋葬に由来しますし、マウリヤ朝のアショーカ王は、これを掘り出して、あらためて八万四千の仏塔を新たに建立したといわれます。大東西域記で有名な玄奘は、インドのあちこちで舎利をまつっていることを報告しています。スリランカや中国にも伝わり、とくに中国では舎利信仰と皇帝

崇拝が結びつきます。日本の鎮護国家の仏教もこの流れを汲んでいます。舎利の歴史はそのまま仏教の歴史ということもできます。どうでもいいことですが、日泰寺の参道には「えいこくや」というインドカレー屋があります。

後で他国のマンダラが見つかったということは、マンダラを日本特有のものだとそれまで考えていたのですか。

チベットにもマンダラが残っていることは、かなり古くからわかっていました。イタリアの東洋学者の G. トゥッチなどは、戦前からチベット、中央アジア、ネパールを探検し、多くのマンダラを報告しています。しかし、それが日本のマンダラと同じ種類のものであるとか、比較研究をするということはほとんどありませんでした。とくに日本で密教やマンダラを研究していた人々が関心を向けることは皆無でした。この分野の国際化はごく近年のことなのです。

ウダヤギリの仏塔の北方に大日如来が配置されていることが不思議です。

胎蔵界の西方にも阿弥陀如来が坐していますが、西方だけ金剛界と共通しているのはなぜですか。共通があるなら各方位の如来はそれぞれにまた相違点ははっきりしているのですか。

東寺五重塔と金三（森注・高野山の金剛三昧院のこと）の多宝塔の内部ははじめて見ました。ふだんは見られないので貴重な写真だと思います。

ウダヤギリの胎蔵大日はたしかに謎です。本来は不空成就が来るべきところなのですから。種智院の頼富先生は、金剛界系の五仏に胎蔵大日が混在していることで、金胎不二の萌芽があるという解釈を示しておられます（頼富本宏　1992　「インド現存の金胎融合要素」『密教学研究』　24: 11-30）。

阿弥陀が金剛界でも胎蔵でも西にいるのは、それだけ西の仏国土とこの仏の結びつきが強かったからでしょう。胎蔵系の四仏の構成は、金光明経などと共通しますが、インドでは金剛界系の四仏に押されて、大日経以降はほとんど登場しません。日本では両者は同体とみなしますが、インドではおそらくそのような解釈はなかったでしょう。東寺の五重塔は毎年正月に公開されます。以前に特別展があったときにも公開されていて、私はそのときに拝観しました。内部の五仏はたしか室町期ですが、いいものです。金三は一般には公開されていませんが、特別に依頼すると見せてくれることがあります。団体の泊まり客があるときなどもです。こちらは鎌倉初期で、私は 2 回拝観したことがありますが、そのすばらしさには目を見はります。内部の写真は霊宝館の図録などにときどき掲載されています。

黒板に書いてあったヴァジュラというのは何なのですか。

本来、ヴェーダの代表的な神であるインドラ（帝釈天）の持ち物で、敵を攻撃する武器です。インドラは雨をもたらす雷の神が起源とも考えられており、その武器であるヴァジュラは稲光をかたどったとも言われています。造型表現としては、以前に授業で紹介したガンダーラの金剛手がしばしば持っていますが、そこではウサギの餅つきのときの「きね」のような形をしています。密教の時代には金剛手や忿怒尊の持物として広く見られるほか、仏具となり、僧侶が手にするようになります。

10. マンダラと儀礼

マンダラが実用的なものだとは思わなかった。仏を中心とした視点で描かれているのには理由があったんですね。砂マンダラを壊すのはもったいない！壊すくらいなら私に下さい。なぜ壊さなくて

はならないのですか。
一般にマンダラは仏教絵画のひとつとしてとらえられているので、礼拝や鑑賞を目的とする芸術品のように理解されています。これはおもに日本のマンダラに当てはまりますが、砂マンダラや立体マンダラのようなチベットのマンダラを見ると、理解できなくなります。ところが、マンダラを儀礼の装置としてとらえると、マンダラ特有の表現方法などが、すべてうまく説明できるのです。マンダラが「仏の世界の縮図」というような説明も、儀礼の文脈でこそ意味を持つのです。しかも、インドの文献では、チベットの砂マンダラとそっくり同じものを、儀礼のために作るように記されています。マンダラの表現方法が、これまでの授業で取り上げてきたインドの仏教美術や密教美術とも結びつくことは、今日の授業でまとめとしてお話しするつもりです。砂マンダラを壊す理由は「すべてのものは無常である」という仏教の大原則を守るためと説明されます。そもそもマンダラは「仏の世界」を象徴的にあらわしているもので、おおっぴらに公開するものではありません。マンダラの秘密は灌頂の儀式を受ける選ばれたものにのみ示されるのです。また、インドでは古代以来、儀礼の装置は一時的なもので、儀礼の終了とともに破壊されたり、放棄されるという伝統があります。マンダラもそのようなものととらえることができます。

マンダラでも絵ではなく梵語で仏を表現したものを見たことがありますが、それはなぜ梵語で示したのでしょうか。字の違いがよくわからないので、僕にはみな同じ仏なのかもと考えてしまいます。
仏のかわりに文字を用いたマンダラは「種子（しゅじ）マンダラ」と呼ばれます。これは、マンダラに含まれるそれぞれの仏を表す文字が定められているからです。仏のかわりにシンボルを用いたマンダラがありますが、これと同じことです。これらの背景には、密教特有の瞑想法があります。マンダラを前にした密教の僧侶は、実際の仏の世界を立体的に瞑想します。マンダラはそのための手助けになる「設計図」です。仏たちの姿も瞑想で生み出しますが、そのときに「核」のようなものが必要です。シンボルや文字がこれらの核に相当します。シンボルが用いられるのは、以前取り上げた「仏の世界の多様化と画一化」と関連し、よく似た姿の仏たちを区別するための目印として、用いられます。一方の文字は形とともに、音も重要で、瞑想の過程で文字を発音します。種子マンダラは日本では作例が多いのですが、チベットではあまり見ることはありません。インドにわずかに作例が残っています。

映画「セブン・イヤーズ・イン・チベット」で、中国人を迎えるために砂マンダラを作っている場面がありました。その精細さに本当に驚き圧倒されました。日本でも家を建てる前に地鎮祭を行いますが、他の国々でもあるものなのでしょうか。
砂マンダラを「セブン・イヤーズ・イン・チベット」で見たことがあるという方が、かなりいらっしゃるようです。私は見ていないのですが、ほかにもチベット仏教を紹介するときに砂マンダラそが取り上げられることが多いようです。さすが「神秘の国チベット」という感じですが、実はこれと同じものをインドですでに作っていたことは、ほとんど知られていません。砂マンダラの制作とそれを用いた儀礼は、インドの宗教文化の中で生まれたものなのです。地鎮祭をはじめとする建築儀礼は、現代の日本でも重要ですが、かつてはさらに多くのしきたりや禁忌（タブー）がありました。このようなことは日本に限らず、おそらく世界中で見られるはずです。家というのはわれわれにとって最も重要な「空間」ですが、しばしば「宇宙」や「世界」と重ね合わされます。家を造ることは宇宙の創造であり、その儀礼は宇宙の開闢と結びつけられるのです。インドもその例外ではありません。日本の地鎮祭はインドの建築儀礼で行われた結界の作法と関係します。

地上のマンダラの装飾が立体マンダラと対応していることに驚きました。立体マンダラを二次元に投影したものが、図像によるマンダラであることに、過去の行者（先師）の豊かな仏教世界観を改

めて感じました。金箆は独鈷杵に似ていますね。医者の道具－武器に関連性は、あまり見いだせないのですが。

立体マンダラはおそらくチベットで生み出されたもので、インドにはこのようなマンダラは作られませんでした。インドで確立し、チベットに伝えられたスタンダードなマンダラの形態をもとにしています。たしかに、本来立体的である「仏の世界」を平面化したものが、絵画のマンダラや砂マンダラなのですが、実際はもう少しややこしい関係にあります（授業ではこれをかなり単純化しています）。市販のマンダラ解説書などには、この「マンダラは仏の世界」という説明が必ず現れますが、「それなら本当の仏の世界はどういうものか」という問には答えていません。授業で繰り返したように、仏の世界はわれわれの認識を超越しているのですから、示すことができないはずです。立体的な構造を持つマンダラは、瞑想やヨーガなどを用いた特殊な宗教体験で認識されたでしょうが、そのイメージを客観的に他者に伝えることはほとんど不可能でしょう。そのため、マンダラという手がかりをもとに、それぞれが立体的に仏の世界を瞑想したのです。つまり、立体的な仏の世界とは、マンダラという平面的な図をもとにして作られているのであって、その逆ではないのです。それだからこそ、マンダラ固有の表現方法には、必然的な理由があるのです。このことは「マンダラとは仏の世界を平面化した」という説明とは正反対になります。金箆はたしかに独鈷杵に似ていて、独鈷杵の片方の先端を球形にしたような形です。インドでどのような形をしていたかは、遺品がないのでよくわかりません。文献では「へら」や「匙」という意味の単語が現れます。日本密教にとって密教法具は重要な請来品であったので、形態を変更したとは考えられず、インドにまでさかのぼる可能性は高いのですが。

「聖なるもの」って「俗なるもの」になるんですね。

授業ではその逆の「俗なるもの」が「聖なるもの」になるという話でした。人間や像が仏になることを、このようにとらえたのです。もちろん、その逆に「聖なるもの」が「俗なるもの」にもなります。「聖と俗」という対概念は、エリアーデをはじめ多くの宗教学者が宗教現象をとらえるために用いています。日本の民俗学では「ハレ」と「ケ」さらに「ケガレ」という概念もあります。「俗なるもの」が「聖なるもの」になることや、「俗なるもの」のなかに「聖なるもの」が現れることを、エリアーデは「聖性顕現」（ヒエロファニー）と呼んでいますが、これも重要な言葉です。

灌頂儀礼の流れの説明を聞いたときに、ふと小さいときに読んだ歴史マンガの 1 シーンなのですが、空海が目隠しをした状態で、投華得仏をしたところ、毎回、花がマンダラの中央の仏の位置に落ちて、まわりの僧が皆、驚いているシーンを思い出しました。このことは、それほど空海がすぐれた僧であったということを表していたのですね。

そのとおりで、真言宗の中では開祖弘法大師のエピソードの中でも重要なもののひとつです。「投華得仏」というのは、灌頂の中のはじめの方で行われますが、私自身、今ひとつこの儀礼の目的がわかりません。マンダラの中に花が落ちた位置にしたがい、自分の「本尊」が決まるということになるそうです。目隠しをして花を投げるという偶然的な方法で、自分に関係の深い仏が何であるかを知るということなのでしょう。マンダラに描かれた仏の世界と、この本尊を媒介にして関係を持つことになります。それならば、マンダラのはしっこの方の仏よりも、中央の大日如来の方がいいでしょう。マンダラの上に落ちない場合もあったようで、それを三回繰り返すと、資格はないということで、灌頂は中止になります。花を投げる弟子は目隠しをしていますし、それまでにマンダラのまわりを移動しているので、真ん中をねらっても、なかなかむずかしいようです。投げる花も、現在では「しきみ」という植物の葉を用いるので、ひらひらと落ちます。現在の真言宗では、マンダラのどこに落ちても、空海にならって、大日如来の上に落ちたということにするそうです。司馬遼太郎は『空海の風景』の中で、このことを「なんと姑息な」と非難していますが、本来、マンダラ

に描かれたすべての仏たちは、根源的な存在である中尊が姿を変えて現れたのですから、別に問題はないのですが。

マンダラの儀礼の構図で、弟子（仏像）となっていますが、弟子の場合の灌頂に、マンダラを使うのはわかりますが、仏像の完成式でどう使うのでしょう。

ほとんど同じように使います。つまり、弟子ではなく仏像をマンダラのかたわらに持ってきて、花をマンダラの中尊の上に置きます（投華得仏に相当）。そのあと、一連の灌頂（水を注ぐ等）を行います。仏像というのが人間の似姿をしているのですから、人間のように扱えばいいのです。仏像の完成式の場合、準備されるマンダラはその仏像が中尊になっているものや、もしそのようなマンダラがなければ、最も関係の深いマンダラです。仏像としてあらわれた仏が本来位置する世界がマンダラであることは、ここからもわかります。なお、完成式は仏像以外にも僧院や仏塔、あるいは経典、数珠のようなものでも行うようです。いずれも「聖なるもの」です。これらの場合、仏像の完成式とは異なるさまざまな例外規定があります。

マンダラはどの僧も作ることが許可されているのですか。マンダラを制作すること自体が儀礼であるということは、スライドで登場した数多くのマンダラも立体マンダラも、僧が儀礼の最中に作ったということですか。あれらのマンダラはすべて儀礼に使われたものだということですか。

インドの文献を見ても、とくに資格とかはないようです。現在のチベットの場合はよくわかりませんが、単純作業なので、むしろそれほど偉くない僧が携わっているのではないかと思います。立体マンダラや絵画のマンダラは、儀礼のために使われたわけではありません。礼拝のために用いられたり、僧が瞑想をするときの参考にされたりします。壁画のマンダラはもっぱら寺院の荘厳のためでしょう。初期の密教経典の中には、地面の上に壇を築いて作られるマンダラと、布などに描いたマンダラの両者があらわれます。儀礼のためのマンダラと、イコンとしてのマンダラが併存していたことがわかります。従来のマンダラの説明は、もっぱら後者にのみあてはまるものだったのです。

マンダラはそれだけで宇宙を表現している。宇宙といえば、いろいろな惑星がある空間を思い浮かべるが、ここでの宇宙とは仏たちの無限の世界を意味している。見たこともない精神世界を表現しようとすることは非常にむずかしいので、マンダラをはじめに描いた人の世界観を聞いてみたいと思った。

そうですね。宇宙や世界ということばは、われわれには地球とか天体とかを連想させますが、「自己と世界」という観念は、そのような知識がない時代にも当然あったはずです。宗教の場合、そこに仏のような絶対者や、われわれの周囲の世界とは異なる「聖なる空間」が登場することが重要となります。

ジニーの話を読んで、今の自分は自分で作り上げたものでなく、他人によって作られたんだなということを実感した。でも、よく考えたら、それは当たり前のことですね。生まれたばかりの赤んぼうは何もわからないから、まわりの人をまねして生きていくしかないので。

ジニーの話は言語学者や子どもの発達の研究者のあいだでは有名なようですが、私はプリントで紹介した BBC の番組ではじめて知りました。テレビでは映像もともなっていてさらに衝撃的でした。日本語でも紹介の本が出ていることを知り、これも入手して読みました（参考文献にあげてあります）。ジニーの話をふくむ前回の配付資料は、「生と死」をテーマにした連続講義を活字にしたものです。今回、続編を配布しますので、それも読んでみて下さい。

マンダラの中心の仏は灌頂の受者だということは、中心の仏は特定の仏ではないのですか。たしかまわりの仏には観音とか金剛手とか、特定の仏がいた気がするのですが。後、チベットでは砂マンダラを崩すけど、日本では敷マンダラを処分したり

しないのですか。
日本の密教で重視されるマンダラは金剛界と胎蔵界の 2 種のマンダラで、いずれも大日如来を中尊とします。弟子はこのうちのひとつのマンダラを前にして、灌頂をうけます。弟子自身が大日如来と同一になります。2 種のマンダラでは、大日如来の周囲の仏たちはまったく異なります。これは、それぞれのマンダラが成立した背景が異なるからです。チベットには 100 種類以上のマンダラがありますが、中尊も含め、仏たちの顔ぶれがそれぞれ異なります。ただし、まったく別のメンバーで作るのはたいへんなので、一部の仏は共通しています。敷マンダラは処分せず、じゅうたんのように巻いて保存します。平安時代の敷マンダラが現在でも残っているのはそのためです。

つまり、マンダラは「仏になったら、こんな世界が見えるんだよ」という図なのですね。
そのとおりです。それを確認する儀礼が灌頂です。

11. 敵対か、融和か

ジャスコにある印度屋というカレー屋さんに、象頭の置物がありました。あれもガネーシャなんかな？今度行ったらじっくり見てみようと思います。神々の家族関係って、後付けで設定されたものなんですね。ちょっとおどろいた。
印度屋はジャスコ杜の里店の中ではなく、そこから西に 100 ㍍ぐらいのところにあります。象頭の置物は間違いなくガネーシャでしょう。私も見た覚えがあります。印度屋にはたまに行きますが、いつもいわゆるバイキングで、カレーの種類が少ないのが残念です。インドでは田舎のレストランでも、もっといろいろな種類があります。以前、店の人に聞いたところでは、中で調理をしているのはインド出身ではなく、ネパールの方でした。印度屋という名前とは齟齬がありますが、ネパールのカレーもおいしいです。金沢では他に、ルビーナとかホットハウスなどのインド料理屋があります。インドの神々の関係は、時代によって異なります。シヴァやヴィシュヌの妻や子とされる神々のほとんどが、本来は単独で信仰されていました。特定の地域や社会階層の人々の信仰の対象だったものもあります。中世のインドでは、このようなさまざまな神が、特定の有力神に収斂されていきます。家族の地位が与えられるのも、シヴァやヴィシュヌと関係を持つことが重要であったからです。この他に、本来別個の神であったものが、有力な神が姿を変えて現れたと解釈されるようになります。たとえば、クリシュナやラーマがヴィシュヌの化身であるといった感じです。これらの現象を人類学者や歴史学者は「大伝統と小伝統」という概念で説明することもあります。

釈迦が誕生したときに降り注いだ甘露の雨と智慧の甘露は、何か関係があるのだろうか。
関係があります。灌頂の儀式の中では阿闍梨（先生）が弟子に瓶の水をそそぐとき、釈迦の事績を再現していると弟子に向かって説明します。儀礼においてもモデルとしての釈迦が重要なのです。釈迦が誕生直後に、いわゆる産湯のような水をかけてもらったのは、古い時代の文献にも登場します。密教では、前回の説明のように、水をそそぐのは龍王ではなく諸仏になっていますが、これらの文献では水をそそぐのは二頭の龍王で、その姿は古い時代の仏伝図像にも現れます。また、このモティーフは、ストゥーパの装飾にもあった「女神への二頭の象の灌水」とも関連します。「水による再生」が基調にあるからです。

灌頂が国王の即位儀礼をモデルにしていること、そして、このとき用いられる水と、真理＝法から降る雨のイメージが重なることは、とても面白いと思いました。このことは釈迦が王子だったこと

と、関わりが深いものなのですか。
そのとおりで、上の回答にもあるように、釈迦があらゆる仏教徒のモデルであったことを示しています。灌頂という儀礼は、仏教が生まれる前の古代のインド世界ですでに行われていた国王即位儀礼の名称です。釈迦も小さい王国の王子（太子）であったのですから、いずれは灌頂を経て、国王になったのでしょう。仏教徒が仏のイメージと王のイメージを重ね合わせようとしたことは、授業でも何度も繰り返して来ましたが、それを保証するのが「仏教徒のモデルとしての釈迦」なのです。

先週欠席してしまったので、砂マンダラの写真をはじめてみました。とてつもなくきれいで緻密で大きくて感動しました。下絵を描いてから砂を敷くのでしょうか。どうやって、あんなきれいな色の砂を作るんでしょうか。法雲地の「真理＝雲」ということについて、ふわふわした感じで不定型な雲が真理だなんて意外です。「雨＝智慧の甘露」というのを表したいがためにそうしたように思えます。実際はどうだったんでしょう。あと、シヴァにはいろんな妻がいるということですが、どの奥さんが一番好きだったんでしょうか。私はパールヴァティーが女らしくていいと思いました。
砂マンダラの砂の材料は、いろいろあったようです。理想的には五種類の色の宝石、たとえば赤はルビー、青はラピスラズリを砕いて作るようです。米の粉や花びらを使うという説明もあります。米の粉の場合は、後から顔料などで色を付けたのでしょう。現在のチベットでは鉱物を使っているようで、成分を調べたら二酸化珪素だったという報告もあります。岩などを細かくして、やはり色を付けているようです。雲のたとえについては、たしかに甘露の雨であることも関係すると思いますが、そもそも雲がインドでは好ましいイメージだったようです。雨期の到来とともに、空全体を覆う雲は、インドの人々が待ち望んでいたものだったのでしょう。仏などへの供物を雲にたとえ、全世界が供物で埋めつくされるというたとえも、文献にはあらわれます。密教の世界観では、全宇宙は無数の仏で満ちあふれているので、それに一番近いイメージが雲なのでしょう。シヴァの妻の中でもパールヴァティーは美貌の持ち主で有名です。シヴァの妻が誰であるかは地域や時代で異なるのですが、絶世の美女でありながら、残虐な性格を持つドゥルガーも、多くの地域で絶大な人気を誇っています（前回の配付資料を読んで下さい）。

シヴァとパールヴァティーの子どものスカンダは、前々回のレポートで重点的に読んだ章によく出ていたので、記憶に残っています。昔、読んだマンガに聖母ドゥルガーが出てきたことを思い出しました。
レポートが役に立ってよかったです。マンガにインドの神が出てきたり、そのイメージや名称が用いられているのは、よくあります。とくに、シヴァやドゥルガーがいかにもインドの神様という感じで登場します。一般に知られているのも、このような有力な神に限られているからでしょう。私の気づいたものでは、吉田秋生の「YASHA」で、ドゥルガーが言及されていました。

ガネーシャの姿がすごく印象的です。今まで愛嬌のない無表情な仏さんたちを見てきたので、こんな神様もいるんだなーって思いました。しかも、お菓子持ってるなんて…。これで商売繁盛なんてびっくりです。シヴァとパールヴァティーは、見た目人間に近いのに、なぜ、象さんの顔になったんでしょう。今まで、どの神が何教かなんて考えたことがなかったのですが、姿は似ているのに異教だったりするんですね。後からできた宗教とかは、もともとある宗教の神の姿を参考にしたりするんですか。
たしかに仏教の仏たちは愛想がないかもしれません。悟っているんですからしょうがないですが…。その分、菩薩や忿怒尊、女尊などに、イメージの多彩さを求めたのでしょう。ガネーシャは一度見ると忘れられない強烈な印象を持っている神ですが、日本にも伝わっていて、聖天（しょうてん）と呼ばれます。密教系の寺院に作例があることが多いのですが、そのイメージから秘仏にされることが一般的です。男女の象頭の神が向かい合って

抱き合っているものもあります。シヴァとパールヴァティーの子どもが象頭のガネーシャであることについては、それを説明する神話がありますが、実際は、もともとは別個に信仰されていたガネーシャが、シヴァのグループに包摂されたからです。仏教とヒンドゥー教の神のイメージが共通することは、この回のテーマのひとつですが、仏教側による単なる借用ではなく、イメージばかりではなく機能や性格なども、しばしば共有されます。インドにおいては、古代のヴェーダの神々はイコン（像）としては表されず、また、仏教も釈迦を人間の姿で表現しませんでした。神々や仏がイメージを有するようになったときに、共通の要素があらわれたという見方もできます。

ひとつの世界に仏はひとりと決まっているのに、同時に仏が二人になってしまうのは仏教的にだめだと言っていましたが、灌頂ではそれが起こっても大丈夫な理由を聞き逃してしまいました。なぜですか。

「ひとつの世界に仏はひとり」というのは「一世界一仏論」とも呼ばれ、大乗仏教の仏陀観の基本にあります。これは裏を返せば、無限の世界が存在するときに、その世界と同じ数の仏の存在が保証されていることにもなります。このことは灌頂の儀礼の前提となっています。灌頂を与える阿闍梨は現在の仏（あるいはすべての仏の根源的な存在である大日如来）に相当し、灌頂をうける弟子が次の仏になります。灌頂をうけることによって、その世界の次の仏に確実になることが保証されるのです。

・仏教において王と仏はイメージが重なり合っているというか、重要な結びつきがあるように見えるのですが、それはなぜですか。私のイメージとしては、王という存在はもっと現実的で、俗世に執着があって、いろんな欲望に満ちていて、悟りを開いた超越的な存在である仏とはかけ離れているように見えるのですが。それから「イメージの戦略」ということばの「戦略」とはどういうことですか。仏にまつわるイメージを、王たちは支配・統治のために利用したのですか。

・先週の授業はけっこう寝てしまって、マンダラの一番大事な部分が聞けなかったようなんですが、プリントとかを読めば取り戻せるでしょうか。

「王と仏のイメージの重ね合わせ」は、これまでにも言及してきました。仏像の誕生のところで、三十二相という超人的な身体的特徴が、この両者に見られることや、マンダラに描かれた王宮は、須弥山上にある帝釈天の宮殿がモデルであり、その主役を神々の王である帝釈天から、仏教の仏に置き換えたものであることなどです。現実の王のイメージはたしかに欲望や執着と結びついていますが、この場合の王は、インド世界の理想の帝王である転輪王です。現実には存在しないけれど、王のあるべき姿と言っていいかもしれません。もっとも、現実の王とまったく無関係ではもちろんなく、おそらく当時のインド人にとって、強大な権力を持った王は、神以上の存在であったでしょう。「戦略」というのは、英語の strategy を意識したことばで、仏教徒が自分たちの宗教の拡大や定着をめざすときに取った手段というつもりで使っています。戦争や統治とかとは直接関係しませんが、「戦略」というこの言葉自体も宗教と政治を重ね合わせるものですね。マンダラの一番大事な部分が聞けなかったのは残念です。授業で繰り返すわけには行かないので、同じような内容の含まれる、私の次の二文献を参照して下さい。どちらも文学部比較文化研究室にあります。

森　雅秀　1997　『マンダラの密教儀礼』春秋社。

森　雅秀　1999　「マンダラの形と機能」立川武蔵・頼富本宏編『シリーズ密教　第 2 巻チベット密教』春秋社、pp. 135-160。

スライドで見た絵が、優しい顔をしていながら残酷な顔をしていたのが印象的だった。また、絵が幻想的に見えた。なぜ、帝釈天は神々の王なのに、「三道宝階降下」では帝釈天は左右に従えられているのだろうか。

マヒシャースラマルディニー（長い名前ですね）の姿が、美しい女性でありながら残虐な殺戮行為をしていることに、強い印象を受けた方が多くい

ました。たしかに一般の女神、たとえばヴィーナスやマリアなどにはこのようなイメージはありませんが、強い女神、恐ろしい女神というイメージは、インドを含め各地にあります。このことは教科書の第 3 章の主題のひとつでもあります。身近のところでも、絶世の美女（あるいはかわいい女の子）が悪い敵を次々とやっつけるという物語は、ハリウッドの映画（チャーリーズ・エンジェル？）をはじめ、日本のドラマやアニメでもおなじみです。インドの神話とそれほどかわらないのですね。帝釈天は本来、神々の王なのですが、中世のヒンドゥー教ではその地位はシヴァやヴィシュヌなどの新興の神に取って代わられ、東の方角を守る役割程度しか与えられていません。仏教の文献や図像に現れる帝釈天は、これよりもましですが、梵天とならび仏法や釈迦を守る護法神というのが一般的です。

別の授業で、インドで「水」という言葉が、日本に伝わって仏にそなえる「あか」という言葉になり、西洋に伝わって、ラテン語の aqua になったという話を聞きました。そこで思ったのですが、ラテン語の ignis（火）は、アグニが伝わったものではないでしょうか。

最後の ignis と agni はそのとおりで、共通の語から派生しています。ラテン語もサンスクリット語も同じインド・ヨーロッパ語族の仲間で、類似した語彙が数多く含まれます。前半の水に関する方は、ラテン語の aqua が、やはりサンスクリットに共通の語があることは正しいのですが（サンスクリットの継）、仏にそなえる「あか」は残念ながら別です。「あか」（閼伽）はサンスクリットでは argha で、動詞 arh から作った形容詞もしくは名詞です。arh の意味は「尊敬に値する」で、argha は「尊敬に値すること、あるいはもの」になります。インドで古来から行われていた賓客接待の儀礼（尊敬に値する大事な客人をもてなす儀礼）に、水を差し出すという作法があり、この水のことを argha と呼んでいました。これが神や仏の礼拝方法にも転用されて、日本で仏に供える水も「閼伽」と呼ばれるのです。機会があれば、「別の授業」の先生に教えてあげて下さい。なお、インド・ヨーロッパ語では水と火を表す語彙にそれぞれ 2 系統あり、形もまったく違うのですが、それは命がある水（あるいは火）と命のない水（火）という使い分けがなされていたからです。たとえば、ラテン語の ignis は命ある火で、英語の fire は命のない火の系統に属します。水も火も単なる物質ではないのです。

時間が人を死に追いやるという考え方は、日本にはあまりないかもしれないです。

そうかもしれません。先週、配付した資料にもくわしく書きましたが、インドだけではなくヨーロッパの死神のイメージ形成には、時間が重要な役割を果たしています。日本で時間を表す「とき」という言葉は、動詞の「とく（解く）」から来ていて、「ほどける」「変化する」というニュアンスだったというのを読んだことがあります。もう少し緩慢な感じを時間に対して持っていたのかもしれません。

12. 周辺から支える神々

密教美術を読み解くことは、単にそのものを知ることだけではなくて、思想とか教理とかいったもっと大きなものをとらえるということなのだなぁと思った。

形があって意味が付き、意味からまた形へと循環しており、美術が高まっていくのがわかった気がした。シンボルも物のだけではなく「印」やカッコウもあると教科書で読んだし、けっこう多様化するのだと思った（「これがないと○○（仏名）

じゃない」とかそういうことではないから…）

最後の講義とても楽しかったです。

・仏教における「おきて破り」って何のことですか。
・美術⊂形というのは、ちょっと納得できないのですが…。
・これからもしいろんなところへ行って、こうした仏教美術を見る機会があったら、少々は「意味」がわかりながら見られるのかなぁと思いました。仏教的・インド的思想などには以前から興味があったのですが、この授業を受けてやっぱり面白いなぁと思いました。

「おきて破り」について。インド美術の伝統では、台座や乗物になるものは、その上の神がふくまれるグループの一員であったり（たとえば毘沙門天とヤクシャ）、上の神の協力者や従属者であったり（たとえばヴィシュヌとガルダ）します。密教の忿怒尊が自分の足の下にヒンドゥー教の神を踏んでいるのも、その神とイメージの上でも密接な関係を持っていたためですが、教理的には敵対者と位置づけ、さらにはその神を制圧するような神話まで作り出しました。このことを指して、ルール違反とかおきて破りと呼んだのです。

「美術⊂形」はすこし飛躍があるかもしれませんが、授業のテーマである密教美術は、それ自体で完結した研究対象ではなく、仏教美術やインド美術、宗教美術などの一領域と見るべきものということをお話ししたかったのです。授業では密教美術が仏教とも密接な関係を持っていることまでは扱ったのですが、インド美術全般までは及びませんでした（最後のテーマはそれを意識していますが）。美術は視覚芸術とか造形芸術と呼ばれることもあり、音楽や演劇、文学などとは異なるジャンルで、突き詰めていけば、形をもった芸術ととらえることができるのではないでしょうか。

はじめの授業のスライドを見ると、きっとこの仏も大きな世界観の図式の一部を占めているのかなぁと思うようになった。

懐かしいスライドがたくさんありましたね（教科書に載っていた写真もあったような）。来週のテストがんばります。

仏教の世界にふれることができてよかった。自分の心の中にも仏教のような奥が深い宇宙が存在すると思った。ただ日常生活を送る上で忘れているのかもしれない。人はいろいろな可能性を持っているというが、まさにそうだと思う。

来週テストかぁ。それに向けて勉強するもんなのか？とても不思議な気がします。もう少し哲学的なことを学んでいきたいです。

全十二回の講義で少しは仏教美術がわかるようになったかと思います。もし寺院に行く機会があれば注意深く見てみようと、そしてできるなら、いろいろなうんちくをまわりに語りたいです。

密教美術はもっぱら空海がどうのこのといったものかと思っていたが、いろいろなスライドなどを見れて面白かった。テレビで密教美術の番組を見たが、マンダラについての CG が先生の図にそっくりでびっくりした。

今日で講義が終わってしまうのは本当に残念です。仏の世界がいろいろわかってとても面白かったです。とてもていねいに描かれたマンダラや宇宙観、またさまざまなモチーフをもとにした仏像などは、印象深く残っています。密教美術と仏の世界は奥深いなぁと思いました。あと、毎回いろいろな質問に回答して下さっていたのはとても楽しみだったし、うれしかったです。ありがとうございました。

イメージの画一化→仏の数の増加→仏の世界の拡大化という流れは、それだけ大きな世界に行きわたるほど仏教は偉大だということを示すためだったのだろうか。またその流れは既存の世界では満足しきれないとか、自分が信じるものがもっと偉大であって欲しいといった考えに基づいていたの

だろうか。機会があれば、その流れに反対した保守的な仏教についても学んでみたい。

この授業を取らなければ、きっとずっと知らないままだっただろう密教美術について、少しでもふれることができてよかったです。

今まで仏像をあまり深く考えずに眺めているだけでしたが、授業を通して、仏像についてさまざまなことを知ることができて、これから仏像を見ていくことが楽しくなりそうだと思いました。

今までの講義で、仏教美術について少し知ることができてよかったです。今まで仏像とかはみんな同じに見えていたけれど、この講義でそれぞれいろんな特徴があり、何らかの意味があることが分かりました。

今日はなぜかサンヴァラ立像がすごくうらやましく感じました。手や顔がいっぱいあるってどんな感じなんやろう？って。もし私が多面多臂でも、もてあますばかりなんだろうけど、仏さんたちは何個、手や顔があっても足りないものなのかなぁーって思いました。触地印仏坐像をじーっと見ていると、写真の中に引き込まれそうになります。大仏!!って感じがすごく出ている気がします。大仏は本物見たことあるから、写真だけでも想像しやすいのかな。今日はよく見たことあるのばっかりだったので、密教では大事なのかなぁって思った。

もう一度、意味までのプリントを見返して、もっと密教美術について理解を深めたいです。

来週のテストがんばりたいです。

専門の学科とはまったくかけ離れたものだったので新鮮でした。今までありがとうございました。

形を見て意味を考える。また意味から形を考えるというのが密教美術のすごさ、また面白さであると思った。また、密教美術は仏教の教えを受け、また、時代や地域を反映し、聖なるイメージ（普遍性）を追求するものだと知って、とても奥深いものだと思いました。

秘密集会マンダラの秘密集会ってなんなんですか。「秘密集会」は「ひみつしゅうかい」ではなく「ひみつしゅうえ」と読みます。「隠された集まり」という意味ですが、残念ながら、何かをやる集会ではなく、仏たちの集まりという意味です。ただし、密教経典には「あやしい集会」や「あやしい実践」を説くものも多く、「秘密集会マンダラ」を説く『秘密集会タントラ』にもそのような内容が含まれています。また、灌頂の儀礼も、時代が下ると、このような要素を含むようになります。なお『秘密集会タントラ』はインド密教史の中でも重要な位置を占める経典ですが、最近全訳が発表されたので、簡単に読めるようになりました（松長有慶　2000　『秘密集会タントラ和訳』法蔵館）。

今まで美術品のように感じていた曼荼羅を、道具としてみるのは不思議な感じがした。

仏教とヒンドゥー教というと、私はまったく別の宗教というイメージを持っていたが、つながっている部分もあり、他の宗教も同じようにつながっているのかなと思った。

仏教の仏像とヒンドゥー教の神が混ざって関係が混乱してしまいます。

降三世明王のスライドを見て、仏教はヒンドゥー教を敵視していたのだなと思いました。ヒンドゥー教は仏教をどう見ていたのだろうか。

改めてインドと日本で似た仏像が多いことを感じた。もう一回今までのことをおさらいできたら、しっかり理解できる気がする。

ヒンドゥー教徒が牛を食べない理由がわかりまし

た。造型作品の見方がわかって、感性が磨かれたような気がします。

今日見た「ムルガン」が印象的でした。すごく原色的で、かつ人間に近くて、日本のものとは違うなーと思いました。

過去見たスライドを今見ると、それぞれのスライドで先生が伝えたいメッセージが伝わってくるようでした。

授業を終えてみて、密教美術に興味を持てるようになった。もとから美術作品が好きだったけど、密教の作品については美術作品ではなく、仏壇などの仏様という感じで見ていた。美術作品としてみると、けっこう細かく作られているなと思った。

この講義を受けて仏教に興味を覚えました。五木寛之の百寺巡礼でも読みつつ、百寺巡礼しようと思います（本気です）。

高校の日本史で習った密教の作品は、日本の密教の作品の中でもほんのわずかだったということを痛感した。本当に奥が深いと感じた。

天体の神様がラーという名前だということですが（聞き違いだったらすみません）、エジプトの太陽神ラーと何か関係があるのでしょうか。ムルガンは少年神なのに、おばさんのような顔をしているなぁと思います。あと、インドの神にはよく肥満体の神が出てきますが、太っていることが美徳とされていたのでしょうか。
わたしの発音が不明瞭だったようです。ラーではなくラーフ（rāhu）です。日蝕や月蝕を起こす天体神で、太陽や月、火星などの「九曜」の中に含まれます。食べるのが仕事の神なので、頭と手だけでできていて、大きな口を持っています。肥満体の神はおもに財宝の神です。代表的なものがガネーシャで、象の持つイメージとも共通します。七福神の中でも大黒や恵比寿が太っているのは、同じ発想でしょう。好きなだけ食べることができるというのは、財宝や富のもっとも具体的なことなのです。

密教美術についていろいろ学べた。

下に踏まれているのは悪いことをしたり、したためだと思っていたので、支えてるとは思いませんでした。密教美術が生み出された理由は、いまいちちゃんとわからなかった気がします。
単純化して言えば、密教美術は仏教の教理や思想、実践などと密接な関係を持ち、密教美術を理解するためには、単に形態や美のみでは不十分であること、また、インドの宗教美術という点からは、ヒンドゥー教のようなインドの他の宗教も視野に入れる必要があること、さらに、宗教美術を生み出すのは、人間が「聖なるイメージ」を必要とするという普遍的な欲求があるということです。

本を読んだり授業を聞いていると、なかなか密教世界も面白いなぁと思いました。とくに曼荼羅は高校の時から日本史で学んでいたので、興味を引かれました。また、仏や菩薩などの違いが最初の頃に比べてかなりわかるようになりました。

最初の頃とたしかにイメージが変わった。

今日の授業を聞いていると、仏教の神はヒンドゥー教の神よりも上の立場にあるのだと思った。しかし、どうして仏教の神がヒンドゥー教の神よりも上の立場にあるのだろうか。
仏教徒が信仰しているのが仏教の神だからです。ヒンドゥー教とは仏教の神など相手にしていません。

仏教の仏をヒンドゥー教の仏が囲んでいるというのを聞いて、仏教の仏の方が地位が高いからなのか、仏教の仏からの視点でその仏像やマンダラが作られたからなのか、よくわからなかった。ヒンドゥー教の人々はどう考えるのだろう。
マンダラのもっとも外側におかれているヒンドゥー教の神は、仏教の神よりも地位が低いように見

えますが、「踏まれる神と踏む神」の関係に見られたように、単に地位の上下だけにその理由を還元すると、本質的なものを見失うような気がします。実際、インドで生み出されたマンダラの多くは、マンダラのもっとも外側にヒンドゥー教の神を並べます。内部の仏教の仏は、マンダラごとで異なりますが、外側のヒンドゥー教の神々はほとんど変化はありません。見方によっては、仏教の仏の世界を支えているのがこれらの外教の神々で、仏教はその中で踊らされているだけのかもしれません。密教美術をとらえるには、仏教だけではなく、インドの宗教という枠組みで見る必要があるということが、前回の授業のポイントです。

ヴァジュラバイラヴァはいつ見ても面白い。

最後のまとめで、最初見たときとは違う仏の見方ができました。

この授業を受けたてのころより、密教美術についての理解が深まった気がします。とくにマンダラについてわかってきました。

ヒンドゥー教の神といえど、仏たちは自分のイメージの源泉を踏みつけてしまうなんて、なんかおそれ多いですよね。今までスライドでたくさんの仏を見ましたが、やはり私は日本の仏が一番好きです。心が落ち着きます。

どうしてあんなに手を持つ必要があったんだろう…？多面なのだろう。なぜ動物に頭をすげ替えることを多くしたんだろう？と思いました。

多面とか多臂の中でどれが主だとかの上下関係があるのかと思った。
多面は中央の面、多臂は胸の前に来る二臂が主要な腕のようです。

金剛界のマンダラがとても美しいと思いました。

密教ではどんな仏も関わりがあるように思える。

また、ヒンドゥー教にも関係があるのにはおどろいた。

前の写真が出てきて懐かしかった。やっぱり砂マンダラはきれいでした。

マンダラはカラフルできれいだなぁと思った。見た目だけでなく、これに意味も含まれているのだから、マンダラは芸術性が非常に高いものですね。密教美術の世界をしっかり理解したとは言えないけど、少し不思議な世界の雰囲気をつかんだ気がします。

各仏像が持つ役割がとても多いと再認識した。人々が拝むだけなら、一体に統一してよいのではないかと思った。なぜ、多くの種類の仏たちが存在し、それぞれに逸話なり役割を添えたのであろうか。人々の信仰心を引き離さぬための策だったのだろうか。

非常に楽しい授業でした。

この授業で密教美術のことをそれなりに理解できたような気がします。今度からは寺院やお寺を訪れて、仏像とかを念入りに見てみようと思います。よおく見たらいろいろな顔を読みとれるような気がするからです。

この講義は好きだったので、終わるのが少し残念です。理解が深いかどうかは別にして、毎回自分の知らないことをたくさん知ることができて満足しています。ただ、テストがとても心配です。

全体をまとめると多くの知識を持ったなぁと思いました。最後の 10 枚のスライドを見て、「あっ、これは！」と理解していて、自分でうれしかったです。私は理系ですが、医療においては精神的、思想的なものが大切なので、勉強できてよかったです。問題は試験です…。

今日の授業は教科書の最後の章と似た話だったの

で、わかりやすかったです。

金大にもどって密教の講義が聴けるとは思っていなかったので、たいへん興味深く参加させていただきました。密教美術の流れを知るときに、考えると中国の仏像などは見たことがないように思うのですが、歴史の中で埋もれてしまったのでしょうか。

中国密教は唐代で最盛期を迎えますが、その後、衰退します。そのため現存作品はたしかにごくわずかです。ただし、例外として日本にもたらされた「請来図像」がかなりの数にのぼります。請来作品にもとづいて作成され作品も、一種のコピーですが中国の様式を伝えています。また、中国本土でも、大安国寺からは密教系の石像群が出土していますし、法門寺の地下宮殿から出土したさまざまな造型作品に、マンダラを含む密教美術が見られます。

仏教の仏とヒンドゥー教の神は多くのイメージを共有していることがわかった。

仏教と密教で解釈が違うことにはおどろいた。興味深い。この講義を通して、本当にいろんな仏像があることを知り、とても面白かった。そのひとつひとつにしっかり意味があるのでとても奥が深い。